平成２５年度

てだこ市民大学
第4期卒業生研究発表会

プログラム

１．開会行事
　（1）主催者あいさつ
　（2）発表会の進め方
２．全体会（80分）
　☆代表者の発表（各学部代表２名　計８名）
　　①コミュニティビジネス・地域振興学部
　　②健康福祉・スポーツ振興学部
　　③文化振興・教養学部
　　④地域・学校支援コーディネーター養成学部

～　休憩（１５分）～

３．分科会（60分）
　　①代表発表者以外の発表
　　②質疑・意見交換
　　③学部長による指導助言
４．閉会行事
　（1）運営委員長による講評
　（2）閉会のあいさつ

日　時：平成２６年３月２日（日）午後２時～５時
場　所：てだこホール 市民交流室
主　催：浦添市てだこ市民大学

★★★ 目　　次 ★★★

1、代表発表者テーマ一覧……P.1

2、代表発表者の卒業研究内容

①コミュニティビジネス・地域振興学部

★ 石 嶺　直 テーマ: 発明した風車で電気料金を半額にし、地球温暖化ガスを削減する ……P.2

★保志門 るり江 テーマ: 浦添市の子育て情報を詰め込んだ地域・行政・企業みんなで作る、ウラソエ的子育て応援マガジン たいようのえくぼ創刊 ……P.8

②健康福祉・スポーツ振興学部

★ 真栄田 久 テーマ: スポーツコンベンションで地域活性化 ……P.16

★ 山城 貞子 テーマ: 認知症について理解を深め、家族の笑顔をつなぐために ～母の介護を通して～ ……P.23
★ 宮城 里江

③文化振興・教養学部

★ 國吉 清 テーマ: 沢岻集落で謡われていた古謡「天親田」の再現の試みについて ……P.31

★ 知名 正男 テーマ: 前田高地の戦いと前田住民 ……P.55

④地域・学校支援コーディネーター養成学部

★ 大浜 明美 テーマ: 結いの心で潤いのある地域に ～ 公園の再生を通して ～ ……P.73

★ 荻堂 かおり テーマ: 学校、家庭、地域をつなぐ取り組み ～地域・学校支援ボランティアを振り返って～ ……P.80

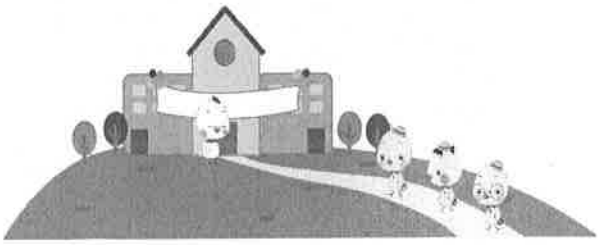
3、各学部の卒業研究レポートの概要集

①コミュニティビジネス・地域振興学部 ……P.85

②健康福祉・スポーツ振興学部 ……P.95

③文化振興・教養学部 ……P.104

④地域・学校支援コーディネーター養成学部 ……P.113



平成25年度

代表発表者

学部名	テ ー マ	発表者
コミュニティビジネス・地域振興学部	発明した風車で電気料金を半額にし、地球温暖化ガスを削減する。	石嶺　直
	浦添市の子育て情報を詰め込んだ 地域・行政・企業みんなで作る、 ウラソエ的子育て応援マガジン　たいようのえくぼ　創刊	保志門るり江
健康福祉・スポーツ振興学部	スポーツコンベンションで地域活性化	真栄田　久
	認知症について理解を深め、家族の笑顔をつなぐために ～　母の介護を通して　～	山城　貞子 宮城　里江
文化振興・教養学部	沢岻集落で謡われていた古謡「天親田」の再現の試みについて	國吉　清
	前田高地の戦いと前田住民	知名　正男
地域・学校支援コーディネータ養成学部	結いの心で潤いのある地域に ～　公園の再生を通して　～	大浜　明美
	学校、家庭、地域をつなぐ取り組み ～地域・学校支援ボランティア活動を振り返って～	荻堂　かおり

てだこ市民大学

卒　業　研　究

学部名：コミュニティビジネス・地域振興学部

氏　名：　石嶺　直

1．テーマ

発明した風車で電気料金を半額にし、地球温暖化ガスを削減する

2．テーマ設定理由

自然エネルギーを利用した発電が可能な風車を発明して国際特許を取得した。その風車を利用することにより、電気料金を半額以下にし、さらに地球温暖化ガスを削減することができる。

3．項立て（研究内容）

1．電気料金を半額にするための概要

2．支援制度の内容

3．特許の内容

4．ベンチャー企業立ち上げに向けて

5．終わりに

学部名：コミュニィビジネス・地域振興学部
氏名：　石嶺　直

１・卒論テーマ

発明した風車で電気料金を半額にし、地球温暖化ガスを削減する。

２・テーマ選定理由

新型風車の国際特許を取得した為に、再生可能エネルギー（自然エネルギーを利用した設備から発生する出力）を利用した新型風力発電により市民の皆様の電気料金を半額にする。

3・電気料金を半額にするための概要

① テーマの内容

浦添市は高台にある為、風エネルギーが豊富で活用すると地球温暖化防止になるが、活用できてないために外国へ高額の化石燃料（石油や石炭等）で発電した電気料金を払い続けている、しかも電気料金は年々高額に成っていくため、非常にもったいないと思い、以前から高台を生かし、電力を作ることは出来ないかと試行錯誤をし、研究を重ね、国際特許(JP2012/61608)を取得しました。

その技術にて我々の老後を豊かに送るための投資、子供や孫への未来への投資として図１の出力 30000KW の世界最大で世界初の風が止まっても無風になっても制御可能、しかも低周波公害が発生しない新型風力発電を創る予定、完成すると燃料が無料の小型発電所に匹敵する商品に成長するため、電気の油田を発見した事と同じになります。

更に研究を重ね 10 年間故障しない新型風車を大量生産することによって、値段を安くすることが出来ます、石油で莫大な利益を上げている国々や OIR マネーの集まる外国企業は倒産するため、恨みを買う恐れはあるが、輸出による利益で沖縄にも大企業ができます。

本題の電気料金を半額以下にするための戦略として最初に作製するのは３分の一の風車、出力 10000KW（2000 世帯の家庭に電気を送れる）を作製し、浦添市庁舎の電気料金を半額にできたら、2 台目の風車、出力 15000KW を作製、浦添市内の小学校と中学校の電気料金を半額にします。

そして 3 台目を創ります、出力 30000KW の世界最大の風力発電が完成したときは、市民の皆様の各家庭の電気料金を半額にする計画です。

送電は託送を利用する予定で、託送とは電力会社の送電線および配電線を利用して送

電する仕組みです。

外国製の風車は家庭用の扇風機のように一定角度の首振りの構造で、360 度の風向には対応できない、無理やり扇風機の首を一回転すると壊れますがそれと同じ現象が実機でも発生します。

ヨーロッパでもオランダの風車は有名で納屋の様な建物に羽根を取り付けただけで直ぐにエネルギーとして利用できる、その訳は、海側から吹く風と山側から吹く風の 2 種類しか無いために山側か海側に向けて、風車を設置すると安定した動力がすぐ手に入ります。

台風やハリケーンの発生が無い、ヨーロッパの穏やかな気候で開発された技術が元と成っている風車を日本に持って来て設置しても、日本には台風や落雷が多く、風向も 360 度と何処から吹くか分からないほど安定しない気候のためヨーロッパ製の風車は直ぐに故障してしまい、日本では使い物に成らないにも関わらず、なぜ乱立するのか私には理解できませんが、ヨーロッパ製の風車が数多く設置され、修理費用として莫大な金額を外国の風車の企業へ払い続けています。

電気を理解し易くするため、電気を飲料水に例えると、現在の自然力を利用する再生可能エネルギーの出力はめちゃくちゃである、その為に濁った水と同じで、飲めなくなります、県民が使用する大型飲料水タンク「電力系統、送配電線の例え」ですが、そこに各家庭の太陽電池および各事業用太陽電池から雨水を集める様に飲料水タンクへ電力を補給すると大型飲料水タンクの水質が悪化して飲め無くなります。

飲み水にするためには水を綺麗にするための「浄化装置」を数多く設置し、大型飲料水タンクの水をクリーニングして水質を良くする方法があります。

水の浄化装置と電気の安定装置は似たような利用方法です《電気の安定装置とは、強力なバッテリーで 10000kW を 1 台設置すると 1 時間出力で 20 億円、5 時間用で 100 億円以上のバッテリー代金が必要になる、寿命は 5 年前後と短い》

そのために私は、沖縄の台風でも故障しないで使用できる新型風車を研究し、発明しました、沖縄県民の底力を発揮して世界をあっと言わしましょう。

底力が有ると思う訳は、その昔、沖縄県は琉球国と呼ばれ琉球国時代は世界の国々を相手に貿易をし、武力で薩摩に侵略されるまでは巨万の富を手に入れていて、武器を持たなくても平和に暮らしていた歴史があります。

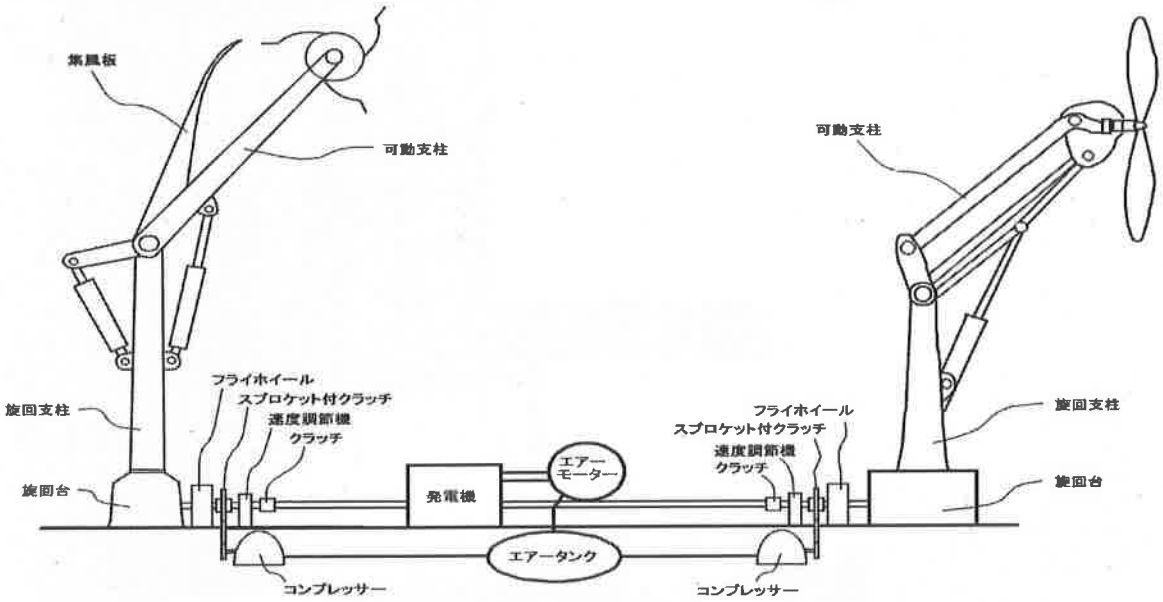
琉球国の富を手に入れた薩摩藩は長州藩へ莫大な軍事費用を融通し薩長同盟を結成し幕府を倒した、その後、薩摩は日本政府を作り上げ現在の日本国家の基礎を確立、それは琉球国の人々から搾取した莫大な富の力である、琉球国の子孫である沖縄県民の潜在能力には底力を秘めていると私は思っています。

② 支援制度内容

新型風車の製作費用の３億円（建設用地は含まれてません）は、経済産業省資源エネルギー庁の独立型再生可能エネルギー対策費補助金を利用する予定です、民間製作事業者の補助金 3/1(1 億円)が製作者側に、発注者側の地方公共団体（浦添市）には半額(1億５千万円)で残りの５千万円は市庁舎の電気料金の金額を返済に充てる計画であるが、5 千万円の借り入れを完済した将来は浦添市の風車となるためメンテナンス費用および託送料以外の電気料金は無料となりますがメンテナンスは私が立ち上げたベンチャー企業で実施するため費用はかなり抑えて行います、または別の企業へ浦添市独自に発注しても差し支えありません。(詳しい支援内容は経済産業省添付資料をご覧ください)

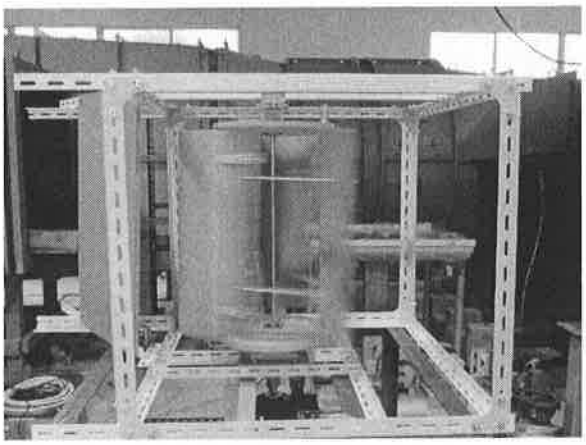
③ 特許の内容

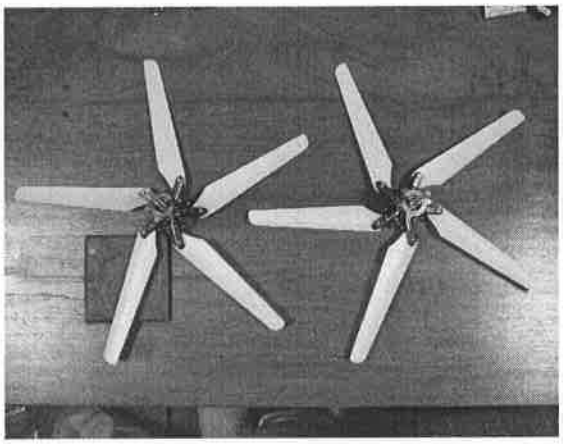
私の発明は高額な電気の安定装置を設置する必要がない新型風車です。新型風車から補給する電力の出力は良質で出力のコントロールでき周波数も一定に保つ電力を供給します。風が止まった場合でも台風や強風時に圧縮エアー、または水素エネルギーに変換して溜めて置き風が無くなった時にエアーモーターや水素エンジン、又は燃料電池で発電するため停電をさせない工夫を沢山盛り込みました。



右側が双子風車のプロペラ（ブレードとも言います）

左側が琉大で風洞実験中の上記図１の左側の風車です。





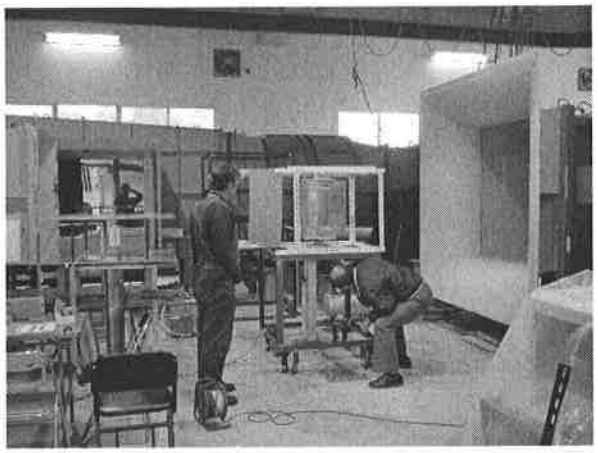


図１の左側風車のサボニウス型を琉大の風洞実験室でトルク測定を伊良部先生に実施して戴きましたがトルクが少ない為に更に効率を上げた仕組みを盛り込んだものが右側の写真です。

図１の右側、双子風車の羽根の部分ですが、写真の一番左側が台風の様な強風、右側が微風の時に羽根を一杯に広げてエネルギーを沢山受けます、写真の真中がある程度の強風用です。

台風でも、或いは風が無くなって無風の状態でも安定した出力をコントロールできる仕組みを盛り込んでいます。

私には 20 年間、風車を研究した豊富な知識が有りますが、知識だけでは世界一の風車を作ることは不可能ですが、皆様の御協力が有って初めて作ることが可能となります。

皆様のお力をお借りして浦添式新型風車を創り浦添市の中に世界一の風車メーカーを育てますと、世界中の研究者の人々や世界一の浦添式風車の見学者や、観光客が浦添市に来訪するアイデアも考案してます、そのために観光客の増加も期待しております。

100 分の一の縮小版の新型風車を発表会場へ持って行きますので詳しい構造の説明を行う予定です、さらに疑問や色々な問題点が有るときは、何でもご質問下さい、全てお答え致します。

今回発表の特許 2011-197637 と 115203 は特許庁電子図書館に、まだ乗ってないが特許取得済みの 2005-124170 と申請中の 2009-002888、2010-228443 は乗っています。

特許を申請してない案が 5 件ありますが、特許申請費用を一生懸命に貯金してから、特許庁へ申請する予定ですが、申請した後は、皆様への報告と新たな発明内容を紹介します。
ベンチャー企業立ち上げのため常温超伝導と介護ロボットの特許を沢山取得する予定でしたが、電気料金の高騰は困るため新型風車の研究開発を優先し、上記の 5 件は趣味のロボットではなく新たな新型風車の特許です。

世界一の新型風車の 100 分の 1 モデルを作製している途中ですが研究費や開発費用、特許費用が底をつきました、その為に是非寄付を御願いします。

来年ベンチャー企業を立ち上げた時、寄付を頂いた方を優先で未公開株を寄付金に見合った分の株を譲渡します。

未公開株を株式に上場した時には 100 倍の価値、それ以上にしてみせます。

更に特典として世界最大の新型風車が完成した時には、寄付を頂いた方の名前をステンレスプレートへ刻み、それを基礎部分へはめ込み永遠に貴方の名前を残せる大サービスが有ります。

（金額によって 4L、3L、2L、L、M、S と分かれていますが、L 以上は本人の似顔絵を銅像のように彫ることができますがブロンズのプレートと彫刻代金は別料金、またステンレスプレートへ家族の写真をプリントで刷ることも出来ますが此れも別料金となります、夫婦、恋人、親子、又はお孫さんとの 2 ショット又は家族の写真をプリントしては如何ですか）

新型風車の出力は、世界一をキープするために、毎年出力を改善するための研究を実施していく予定ですが、万が一出力を追い越された場合は、出力アップする案を既に持っていますので直ぐに、世界一を取り返します。

ゆうちょ銀行
１７０６０－７７９２３７１
石嶺　直（イシミネ　タダシ）

寄付を送金して戴く方は、ゆうちょ銀行振込用紙または ATM 支払機へ名前と連絡先を記載願います、来年ベンチャー企業を立ち上げた時に、連絡いたします。
（其の時に株の譲渡と株式の情報も連絡いたします）

てだこ市民大学

卒　業　研　究

学部名：コミュニティービジネス・地域振興学部

氏　名：　保志門　るり江

1．テーマ

浦添市の子育て情報を詰め込んだ
地域・行政・企業みんなで作る
『ウラソエ的子育て応援マガジンたいようのえくぼ』創刊

2．テーマ設定理由

浦添市は、市民の平均年齢も39歳とまさに子育て世代の多い街である。
子育てしやすい街という評判もあり、保健相談センターや市役所の窓口などでも沢山の子育て情報が発信されている。さらに市内では子育てカフェや雑貨屋さん、おもちゃやさん、児童館や子育て支援センターなど、その他の子育て環境もかなり充実してきている。

しかし、情報が個々に発信されており、サービスの提供者と必要な人がうまく繋がっておらず、子育てで忙しい世代が情報を集め、ストックしづらいのが現状である。

特に子どもが小さいうちは、親も子育て初心者でどこから情報を探せばいいのか分からず、いいサービスが沢山あるのにも関わらず、知らずに利用していない人も多い。一方サービスを提供している側も、うまく情報を発信できずに悩んでいる。

現在、私はNPOたいようのえくぼの代表者として、沖縄の子育て初心者が欲しい情報を集めた情報誌、【オキナワ的子育て応援マガジンたいようのえくぼ】を沖縄全域で発行しており、その地域版の第1弾として子育て世代の多く住む浦添市から子育て情報の発行をしてみたいと考えた。

3．項立て（計画内容）

1，　たいようのえくぼ　とは
2，　浦添市の子育てサービスの現状
3，　子育て世代の現状とフリーペーパー発行の意義
4，　『ウラソエ的子育て応援マガジンたいようのえくぼ』コンセプト
5，　制作イメージ
6，　まとめ

浦添市の子育て情報を詰め込んだ
地域・行政・企業みんなで作る
『ウラソエ的子育て応援マガジンたいようのえくぼ』創刊

【テーマ設定理由】

浦添市は、市民の平均年齢が39歳とまさに子育て世代の多い街である。

子育てしやすい街という評判もあり、保健相談センターや市役所の窓口などでも沢山の子育て情報が発信されている。

さらに、市内では子育てカフェや雑貨屋さん、おもちゃ屋さん、児童センターや子育て支援センターなど、その他の子育て環境もかなり充実してきている。

しかし、子育てに関する情報が個々で発信されており、サービスの提供者とサービスの必要な人がうまく繋がっておらず、子育てで忙しい世代が情報を集め、ストックしづらいのが現状である。

特に子どもが小さいうちは、親も子育て初心者でどこから情報を探せばいいのか分からず、いいサービスが沢山あるのにも関わらず、知らずに利用していない人も多い。

一方、サービスを提供している側も、うまく情報を発信できずに悩んでいる。

現在、私は実際に子育てをしながら、ＮＰＯたいようのえくぼの代表者として、沖縄の子育て初心者が欲しい情報を集めた情報誌『オキナワ的子育て応援マガジンたいようのえくぼ』を沖縄全域で発行しており常に子育て情報を探しているのだが、やはり後で知る事もまだまだ多いし、サービスの存在すら知らない人の方が多いと感じている。

そこで、『オキナワ的子育て応援マガジンたいようのえくぼ』の地域版第１弾として、自分が実際に現在子育てをしており、子育て世代の多く住む浦添市から子育て情報誌を発行してみたいと考え、このテーマを設定することにした。

２．浦添市の子育てサービスの現状

浦添市での子育てサービスの現状として、まず、様々なタイミングで通知やチラシ、ポスターなどで各種お知らせがある。

●マタニティ時期

産婦人科で妊娠受診後、保健相談センターで母子手帳交付。その時にマタニティの講座やしおりの案内なども提供。

●出産

予防注射や検診の年間スケジュールの他、誕生日に合わせた受診表などが送られてくる。市役所からは、各手続きの情報などがもらえ、各課で手続きを行う。出産後は新生児訪問やベビースクールなどのサービス、病院情報など。

●未就学児時期（簡単な案内はあるが、主に自分で探す情報）

・保育園（認可・無認可の情報）保育課で配付及びインターネットでダウンロード
・認可保育園の申込み。無認可園に関しては、各自で申込み
・ファミリーサポートの情報、加入受付
・シルバー人材センターや病児保育の加入手続き
・子育て支援センター、児童センター、図書館や、ハーモニーセンターなどでの講座案内
・市役所でのパネル展
・まなびフェスタなど、各種イベント時の子育て情報発信

●その他

・広報うらそえ…ハーモニーセンター、浦添消防署、保健相談センター、浦添市美術館、浦添市立図書館、浦添市中央公民館、浦添市リサイクルプラザ他地域のイベント情報などを配信。

☝イベント情報や、毎月挟み込みで自治会の情報のある地域もあるが、自分の住んでる地域以外の地域の情報は分からない。

・浦添市ホームページ…様々な分野に関する細かい情報が掲載されているので、詳しい情報を探したい場合に活用したい。

4.『ウラソエ的子育て応援マガジンたいようのえくぼ』コンセプト

前述した発行の意義等を踏まえ、

「たいようのえくぼの“ママが作る”“オシャレな”イメージをそのまま地域版にした浦添市の子育て情報をぎっしりつめこんだフリーペーパー」

というコンセプトのもと、浦添市の行政・地域・企業等、「浦添の子育てママと子育て応援団」みんなで作る子育て情報誌『ウラソエ的子育て応援マガジンたいようのえくぼ』を発行したいと考える。

具体的な情報の内容としては、下記の内容を検討している。

●ターゲット（マタニティー小学校入学まで）

各カテゴリー別にデータや実際の利用者の声も集め、データブックだけではなく、読み物としても楽しめる情報誌を制作。

●配付方法

配付は主に市役所などだが、イベント会場や市内の子育て関連のお店などでも配付し、市外の人達にも浦添市の子育て情報をアピールする。

●内　容

・市役所の発信する子育て情報（各担当部署の説明など）
・保健相談センターが発行する、予防注射、検診スケジュールなど
・子どもに関する、病院、救急、病児保育
・デイケア、ファミリーサポート情報（加入の仕方や内容、使い方など）
・認可・無認可の保育園、こども園一覧（園庭の大きさ、預かる人数、先生の数、時間、月謝、延長保育、特徴など）
・学童（地域版だけではなく市内全ての学童）生活や、料金なども
・お稽古・講座や幼稚園・小学校などの取り組みの紹介
・地域の子育てカフェ、雑貨屋、おもちゃ広場、公園などのお出かけ情報
・浦添市にある企業からの子育てイベントや応援クーポン、お得情報など（企業からの資金提供及び、子育て支援情報の提供）
・各自治会の子育て情報（お祭りやイベント情報など）
・ママサークル、NPO、子育て支援イベント、施設
・防災情報
・ボーイスカウト、ガールスカウト、ボランティアなど

６．まとめ

ここまで、私が携わってきた子育てマガジン『オキナワ的子育て応援マガジンたいようのえくぼ』での経験をもとに、浦添市に密着した地域版第１弾『ウラソエ的子育て応援マガジンたいようのえくぼ』の発行に向けての企画案を検討してきたが、市民大学に入学して知った事・出会う事の出来た情報の発信も含め、子育て世代を地域全体で応援することは、その地域の活性化につながる可能性を持っていると考える。

浦添市は、全国的に見ても非常に若い世代が多く、子育て真っ最中でいろいろなサービスや情報などを必要としている中で、地域ぐるみで『ウラソエ的子育て応援マガジンたいようのえくぼ』を発行することはとても大切なことだと思われる。

そして、子育て支援が充実した、住みよいまちづくりに少しでも貢献できるように、これからも取り組んでいきたいと思う。

てだこ市民大学

卒　業　研　究

学部名：　健康福祉・スポーツ振興学部

氏　名：　真栄田　　久

1．テーマ

スポーツコンベンションで地域活性化

2．テーマ設定理由

・沖縄県は、国内で唯一の亜熱帯気候で、冬場でも温暖な気候はスポーツ大会の開催やキャンプ、合宿に国内では最適な地域といえるのではないでしょうか。
このような気候特性を活かし、浦添市が全国レベルの大会やキャンプ、合宿等を誘致する事により、プロ選手や一流選手と地域との交流が盛んになり、地域への経済効果も大いに期待できるものと思います。また、プロ選手や一流選手のプレーや練習を間近に見ることによって青少年に夢や希望、感動を与え、多くの青少年および地域住民がスポーツを愛し、取り組むことで青少年の健全育成、スポーツ向上にも役立つことでしょう。このようにスポーツコンベンションの誘致で経済効果、青少年の健全育成等、いきいきとした街づくり、地域の活性化に繋げることとしたいとの考えから、テーマを設定しました。

3．項立て（概要でも良い）

はじめに
1、沖縄県のスポーツコンベンションの現状
　(1)カテゴリ別件数
　(2)種目別のキャンプ合宿実施件数
　(3)主な開催会場（市町村別）のキャンプ合宿件数
2、浦添市のスポーツコンベンションの現状
3、スポーツコンベンション効果
　(1)プロ野球キャンプの経済効果
　(2)浦添市の PR 効果
　(3)青少年の健全育成、スポーツ力の向上効果
　(4)市民の環境美化への取組み
4、課題
5、まとめ

研　究　内　容

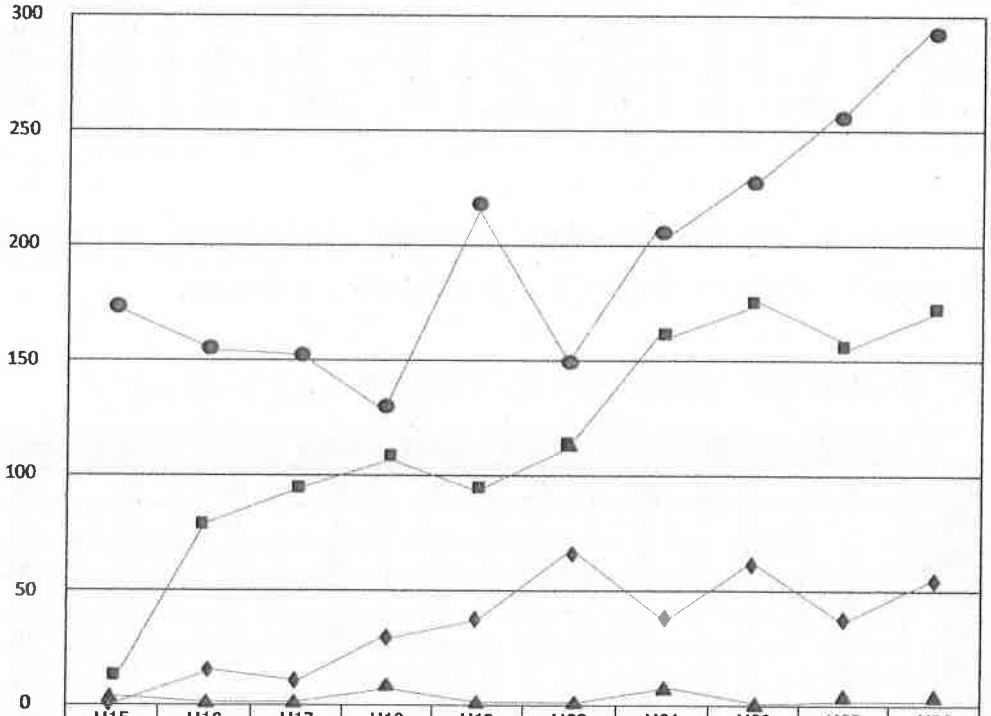
はじめに

沖縄県は今や観光立県と称され、観光産業は沖縄の基幹産業に位置付けられています。年間約 641 万人(2013 年)の観光客が沖縄を訪れています。その中にはプロ野球のキャンプをはじめとしてスポーツコンベンション関連のお客様も多数含まれていて、特に近年では「プロ野球の春季キャンプは沖縄」と定着し、韓国のプロ野球チームも沖縄で春季キャンプを行うなど春季キャンプのメッカとなっています。今年は日本の 10 球団が沖縄で春季キャンプを行ないますが（2 軍は 6 球団）韓国からも 6 球団がキャンプを行う予定です。野球に限らず陸上競技、サッカー、ソフトボール、バスケットボール、武道など数多くのスポーツキャンプが予定されています。

沖縄県は 2021 年度には入域観光客数 1 千万人を目指すとしておりますが「沖縄 21 世紀ビジョン基本計画」の中でも観光産業を成長させるには「スポーツコンベンション」を積極的に推進し「スポーツアイランド沖縄」を形成することをうたっています。このような状況下、浦添市も県と連携しつつスポーツコンベンションに取り組むことが重要であると思います。

1、　沖縄県のスポーツコンベンションの現状

（1）カテゴリ別件数（H15 ~ H24）



	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
●キャンプ・合宿・自主トレ	164	152	151	131	219	150	205	228	253	282
▲大会・合宿	1	0	0	10	0	0	8	0	3	3
■大会・試合	8	77	93	106	96	113	166	175	157	168
◆イベント	1	11	7	32	40	64	43	57	40	52
合計	174	240	251	279	355	327	422	460	453	505

H24年度の実績で一番多いのは沖縄市で68件、これは同市が県総合運動公園も含めた施設面の充実が寄与していることと思われるが、同市は1990年にいち早く「スポーツコンベンションシテイ宣言」を行いスポーツイベントの誘致に熱心に取り組んだ結果だと考えます。また国頭村が43件と沖縄市に次いで多いのは「くいなエコ・スポレク公園」計画時からスポーツで交流人口を増やし地域振興を図ることを目指し熱心な誘致活動の結果であるといわれています。

２、浦添市のスポーツコンベンションの現状

上記１の（３）の表で見る限り浦添市は他の７市町村と比較すると極端に少ない状況である。施設面でも沖縄市以外の市町村に比べほぼ遜色がないことから少ない要因は何なのか分析を行いスポーツコンベンションの推進を図る必要があるのではないかと考えます。今年は日本ハンドボールリーグ、ＪＯＣハンドボール九州地区予選や高校野球など大会、合宿が行われることから10件以上になりそうですが、それでも施設面からしてもまだまだ増やせる余地があるのではないでしょうか。ただ来年、再来年にハンドボールの全国レベルの大会が予定されていることはハンドボール王国として一つの光明です。浦添市が国内ハンドボールの合宿地として全国に認知されることを期待したい。

３、スポーツコンベンション効果

（１）プロ野球キャンプの経済効果（2013年）

昨年のプロ野球キャンプは9球団が（2軍は５球団）キャンプを行い、その経済効果は81億6100万円と試算されています。観客数は約29万3000人（オープン戦含む）で過去最高の観客数です。これは好天に恵まれたことや沖縄県によるキャンプＰＲ事業が奏功したものと考えられます。（県外客は4万3千人と推定されています）

今年は10球団が春季キャンプを行います（2軍は6球団）昨年よりも１球団増えることから更なる経済効果が期待されます。

※　プロ野球以外では那覇マラソン１６億８千万円(２００９年)、沖縄市マラソン６億４千万円(２０１１年)、ツールド・沖縄５億５千万円(２０１０年)などと算出されています。

（２）浦添市のＰＲ効果

プロ野球の春季キャンプ状況は連日ＴＶやスポーツ新聞で取り上げられており、その際、キャンプ地の紹介なども行われるのでマスコミによるキャンプ地のＰＲ効果は大きいものがあります。プロ野球ほどではないが他のスポーツにおいてもマスコミによる情報発信はスポーツ雑誌含めかなり行われています。ここで地元がいろいろ工夫することで浦添市が全国に情報発信され紹介されることになりＰＲ効果は多大です。

（３）青少年の健全育成、スポーツ力の向上効果

を合言葉に全国に働きかけてみては如何でしょうか。

5、まとめ

冬場の温暖な気候を利用したスポーツイベント、キャンプ、合宿は年々、増加しています。観光収入の中に占めるスポーツコンベンション収入は大きなウェイトを占めているものと思います。(プロ野球や那覇マラソンなど一部の経済効果は民間企業が算出していますが、まだ多くのスポーツコンベンションの経済効果は算出されていない)

産業の少ない沖縄県は観光立県として観光産業に力を入れています。2021年度には観光入域客数１０００万人、観光収入１兆円をめざして取り組みを強化すべく一昨年、県の組織に「文化観光スポーツ部」を新設し観光客誘致に向けて「スポーツアイランド沖縄」として戦略的にスポーツコンベンションで入域客数を増やしていく考えです。

県内の各地域ではいろいろ地域特性を生かしたスポーツが行われています。車の少ない北部では「ツール・ド・沖縄」、海の綺麗な宮古島、石垣島では「トライアスロン」等、またマラソン大会は県内いたるところで開催され県全体では年間約30レースにまで増えています。それぞれ毎回参加者は増加していく傾向にあり、この各地の諸大会にも本土からの参加者が増えつつあります。(ツール・ド・沖縄は参加者4500人のうち70%が県外。那覇マラソンは３万人のランナー中、10、700人は県外のランナー)

浦添市でも市にとってふさわしいスポーツコンベンションンを地域振興、スポーツ振興の観点から検討し誘致に努めることが重要と考えます。。浦添市には現在、大きなイベントして「てだこウオーク」があり、老若男女、車イス使用の方も参加されています。これを全県的、全国的なイベントに育てることも大切だと思います

。

そして何よりもスポーツコンベンションを積極的に推進していくという姿勢、取り組みが重要だと思います。2021年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて国はこれから選手の強化育成に取り組んで行くものと思われます。これを絶好の機会と捉え、浦添市はいち早くこれに目を向け強化選手の合宿誘致に向けて県と連携しつつ取り組むことも一策と考えます。

このように各地域でいろいろなスポーツイベントが行われ、プロや一流選手との交流および地域間交流が行われることはスポーツを身近に感じ興味を持ち気軽に取り組む事になります。このようなことがひいては生涯スポーツに繋がり、健康長寿に結びつくのではないでしょうか。そして地域の皆さんがスポーツを通して絆を深め文化を高め、生き生きとした生活、活力ある街作りに繋がることでしょう。更にスポーツコンベンションによる地域への諸効果も考慮するとスポーツコンベンションはまさに地域の活性化を推進する大きな要因になるものと思います。

てだこ市民大学

卒　業　研　究

学部名：　健康福祉・スポーツ振興学部

氏　名：　山城貞子　・　宮城里江

1．テーマ

認知症について理解を深め、家族の笑顔をつなぐために
～　母の介護を通して　～

2．テーマ設定理由

・母が2、3年前より、同じ言葉の繰り返しや、物忘れが多く見られるようになり、加齢に伴う物忘れだと思っていました。私たちは、半信半疑な気持ちで病院を受診したところ、アルツハイマー型認知症と診断されました。それで、私達家族は各家庭の都合や動ける時間帯を考慮しながら、母の世話（介護）を始めました。
しかし、介護に対する思いが先走り、気持ちがかみ合わずギクショクしていきました。
そこで、認知症について理解を深め、介護の仕方を工夫することで、家族が笑顔につながるのではないだろうかと考え、このテーマを設定しました。

3．項立て（概要でも良い）

1、卒業研究のテーマ
2、テーマ設定理由
3、研究内容
　（1）認知症とは
　　①認知症の原因
　　・脳血管性認知症の特徴
　　・アルツハイマー型認知症の特徴
　（2）全国・浦添市の認知症高齢者の現状
　　①全国の高齢者における認知症の実態
　　②浦添市における高齢者認知症の実態
4、母の介護の実践
　（1）実践例
　　・事例1：母の一週間のスケジュールと役割分担
　　・事例2：なんでも帳（ノート）を通して互いの思いが通じあった事例
　　・事例3：メモ用紙を見て行動に移せるようになった事例
5、まとめ
6、おわりに・今後の課題　　※参考文献・資料

《脳血管性認知症の特徴》

脳の血管が詰まったり、破れたりすると、脳細胞に酸素や栄養が届かなくなります。そのために脳の機能が低下して発症するものを「脳血管性認知症」といいます。原因はいろいろありますが高血圧症や高脂血症などの生活習慣病のために、脳の血管の動脈硬化が進んで発症することが最も多い原因です。

《アルツハイマー型認知症の特徴》

アルツハイマー型認知症とは、脳の萎縮によって脳全体の機能が低下してしまうタイプの認知症をいいます。

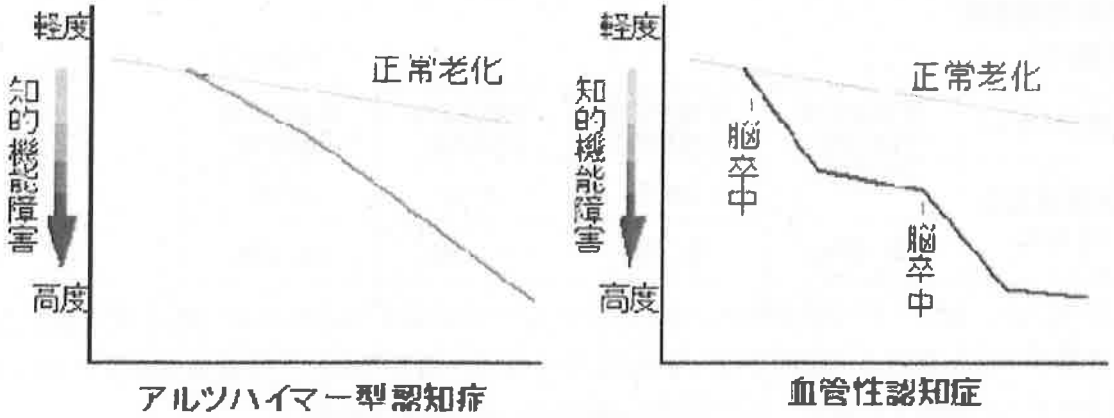
症状としては、**記憶障害**のために新しい情報がインプットできなくなり、直前のこともすぐに忘れてしまいます。日時や季節の感覚があいまいになり、電車に乗っていて目的地を忘れたり、ここがどこなのか分からなくなります**（見当識障害）**。同じものを何度も買いこんだり**（理解、判断力の低下）**、料理の手順が分からなくなったりします**（実行機能の障害）**。
さらには、言葉がスムーズに出なかったり、洋服をきちんと着られなかったり、慣れたところでも道に迷うようになったりします。

アルツハイマー型認知症と血管性認知症の違い

	アルツハイマー型認知症	血管性認知症
年齢	中年から高齢まで	60歳以降
性	女性に多い	男性に多い
発症と経過	ゆるやかに発症し徐々に進行する	急に発症し階段状に悪化する
主な症状	全般性痴呆、失語、失行、失認	まだら痴呆、運動麻痺、歩行障害
感情面その他 もの忘れの自覚	多弁、多幸、徘徊 早期に消失	抑うつ、感情失禁 晩期まで残る
CT／MRI SPECT／PET	＊海馬の変性 側頭頭頂葉の血流代謝の低下	小梗塞の多発、白質の不全軟化 主に前頭葉の血流代謝の低下

＊：早期には脳萎縮のみられないことがある。

アルツハイマー型認知症と血管性認知症の経過



認知症介護研究・研修仙台センター

②浦添市における高齢者認知症の実態

＜介護が必要な認知症高齢者の増加＞

認知症を知る指標に「認知症高齢者日常生活自立度」があります。「認知症高齢者日常生活自立」は自立からＭまで８ランクの区分があり、**Ⅱ以上になると日常生活にも支障を来す症状や行動がみられます。**

【表 1】認知症高齢者の日常生活自立度別人数および割合　　（平成 25 年 3 月 31 日現在）

	保険者		要介護（要支援）認定者数Ａ	Ａ「認知症高齢者の日常生活自立度判定基準」におけるランク別人数Ｂ（人数）							
				軽 度 →			→	→	重 症		
				自立	ランクⅠ	ランクⅡa	ランクⅡb	ランクⅢa	ランクⅢb	ランクⅣ	ランクＭ
65 歳以上	浦添市	人数（人）	2642	308	437	187	745	677	162	218	8
		割合（%）	－	11.7%	16.5%	7.1%	（1位）28.2%	（2位）21.6%	6.1%	8.3%	0.3%
	沖縄県	人数（人）	49.938	6.307	10.095	6.308	10.973	9.805	1.991	3.967	490
		割合（%）	－	12.6%	（2位）20.2%	12.0%	（1位）22.0%	19.9%	4.0%	7.9%	1.0%
40 ～ 64 歳	浦添市	人数（人）	152	35	33	11	39	18	4	11	1
		割合（%）	－	（2位）23.0%	21.7%	7.2%	（1位）25.7%	11.8%	2.6%	7.2%	0.7%
	沖縄県	人数（人）	2.425	661	552	283	423	287	40	138	21
		割合（%）	－	（1位）28.1%	（2位）22.8%	11.7%	17.4%	11.8%	1.6%	5.7%	0.5%

※認知症を有している人であっても要介護（要支援）認定を受けていない人はカウントしていない為、実際際認知症は多いと推定される

＜認知症高齢者の日常生活自立度＞

「認知症高齢者の日常生活自立度」について浦添市と沖縄県の比較をした表です。

浦添市は、ランク「Ⅱb」と「Ⅲa」の方が多く、沖縄県は、ランク「Ⅱb」と「Ⅰ」の方が多いことがわかります。40 歳～64 歳を比較しても、浦添市は「Ⅱb が」、沖縄県は「自立」の割合が高いという結果になっています。

【表２】要介護（要支援）認定における主治医意見書の第１診断名の順位

※表内の病名全てが、認知症の直接の原因となるわけではありません

（平成 25 年 3 月 31 日現在）

分　類	１ 位	２ 位	３ 位
全体	脳血管疾患	アルツハイマー病	骨折
４０歳～６４歳	脳血管疾患	糖尿病合併症	末期がん
６５歳～７４歳	脳血管疾患	アルツハイマー病	骨折
７５歳以上	脳血管疾患	アルツハイマー病	骨折

表２は、要介護（要支援）認定における主治医意見書に記載された第１診断名の順位です。浦添市の特徴は、40 歳～64 歳の若い世代を含め各年代において、脳血管疾患が上位を占めています。脳血管疾患（脳梗塞や脳出血）は、脳の血管の詰まる場所や破れる場所により、認知症を発症する場合があります。

次に多いアルツハイマー病ですが、身体活動、知的活動や他者との関わりが少ないと発症・悪化しやすいことがわかっています。

65 歳以上の場合、転倒による骨折後、認知症を発症することが多いようです。

《事例2》 なんでも帳(ノート)を通して互いの思いが通じあった事例

＜きっかけ＞

・なんでも帳(ノート)を通して、自分が担当してない曜日の様子を知り、母の状態を共有する。

(メモ内容) ～ないないづくしから～

・一日中水が出っぱなし
・鍋が真っ黒こげ
・カバンがない
・起きていない
・薬を飲んでない

(メモ内容) ～確認事項へと変わる～

・曜日毎の生活の様子
・睡眠の様子、お風呂の確認
・病院からの伝言
・日程スケジュールの変更
・薬（飲む、貼る）の徹底

心の変化

長男：単身赴任地（東京）から月２ほどで帰省する長男が「ねぇねぇ達も頑張っているんだね～」と、理解を示すようになった。

嫁　：夜中の出来事や困った事、確認して貰いたい事などを知らせるようになった。

姉妹達：飲み薬や貼り薬など、飲みこぼし等をしっかりと確認するようになった。

病院側：それぞれの接し方の違いが脳への刺激となり、状態が安定している。

※母に対して優しく声かけができるようになったり、お互いのことを認め合えるようなってきた。

《事例3》 メモ用紙を見て行動に移せるようになった事例　～ 今日は○月○日○曜日です。～

＜方法＞　嫁：今日の予定をメモ用紙に書く。（嫁が仕事に出かける前に準備）
母：母がメモを見て自分で行動できるようする。
姉妹：母と一緒に声を出して読んだり、確認したりして準備が進められるようにする。

＜例＞

今日は
１１月２０日　月よう日.
日舞が あります.
お風呂に入って
じゅんびして下さ

今日は
12月24日 火よう日.
整骨院に行く日です.
お風呂に入って
じゅんびして下さい

今日は
1月8日. 水よう日
みねい病院に
行きます.
10時までに
じゅんびして下さい

今日は
1月16日 木よう日.
城間デイサービスが
あります
9時15分に
むかえが来るので
じゅんびして下さい

卒　業　研　究

学部名：文化振興・教養学部
氏名：國吉　清

1、テーマ

沢岻集落で謡われていた古謡「天親田（アマウェーダ）」の再現の試みについて

2、テーマの設定理由

アマウェーダは米を作る家長（男性のみ）による農耕儀礼として謡われていた古謡である。厳しい自然環境の中、日々の生活を共同で行いながら絆を強くし生きる生活様式とそれを支える精神（祈り）文化を謡を通して垣間見ることができる。しかし、社会経済の変化に伴ってその伝統行事は衰退・消滅の道をたどるが、第二次大戦による多くの行事担い手の死去はそれを決定的にしたと思われる。現在、その行事で謡われたアマウェーダを謡える人は皆無であるが、幸い祖父や父親が謡っていたのを聞いたことがある方々が数名いる。

アマウェーダとはどのようなものであったのか調査研究し、再現の試みを通して、厳しい自然と向き合いながら共同体としての絆に依拠して生活してきた先人達に学ぶことができればとの思いで取り組んだものである。

3、概要

Ⅰテーマ設定理由
Ⅱ本論
　1古謡「アマウェーダ」について
　　(1) アマウェーダの文学的位置づけ
　　(2) アマウェーダについて（採譜事例や解説文献から）
　　(3) 現存する南城市字仲村渠のアマウェーダについて（現地調査）
　2 沢岻集落で謡われていた「アマウェーダ」について
　　(1)アマウェーダーの歌詞について
　3 再現の試み（実際に歌って見る）
Ⅲ今後の課題
Ⅳおわりに

＊参考文献

・沢岻字史編集委員会編「字史たくし」
・外間守善・波照間栄吉編著「定本おもろさうし」角川書店
・服部四郎・仲宗根政善・外間守善編「伊波普猷」平凡社

沢岻で謡われていた

古謡「天親田（アマウェーダ）」の再現の試みについて

てだこ市民大学　文化振興・教養学部
國吉　清

I、テーマ設定理由（はじめに）

琉球王府が編纂した「おもろさうし」には1554首の謡（オモロ）が記載されている。そのうち67首は浦添に関わる謡である。浦添市はその内9首を石に刻みオモロにゆかりのある土地に建て文化財に指定している。下の写真はその一つで字仲間の浦添カルチャーパーク内にある石碑である。

図-1：石碑の全体写真

図-2：刻印されているオモロ

その石碑には、「古琉球の時代にうたわれたオモロ（神歌）を集めた書物「おもろさうし」の第15巻に登場する歌の一つが刻まれている。ちなみに、おもろさうし「第15巻」は天啓3年（1623年）に編纂されている。オモロの石碑の横には、下の写真のように、その対訳と解説が刻まれている。その解説には、「浦添には酒が満ちあふれていることを繰り返し述べ、その豊かさに感謝して、今日は酒宴を開こうではないか」と説明されている。さらに、「酒が多いのは生産の盛んな豊かな土地であることを自慢し、「世寄へによ」は幸福を招く人の意味で浦添城に君臨する指導者のことを指しており、明るく、おおらかな気分でうたわれた浦添賛歌である」と解説されている。

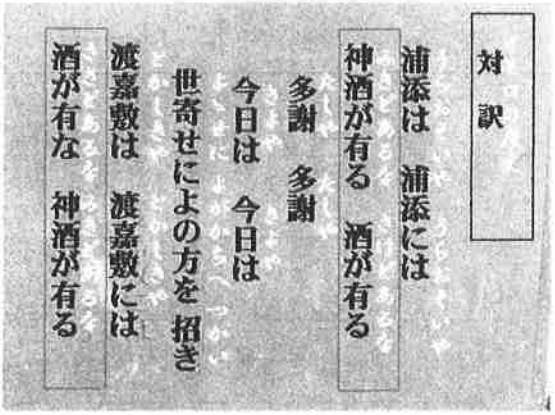


図-3：おもろの原文と対訳

Ⅱ、本論

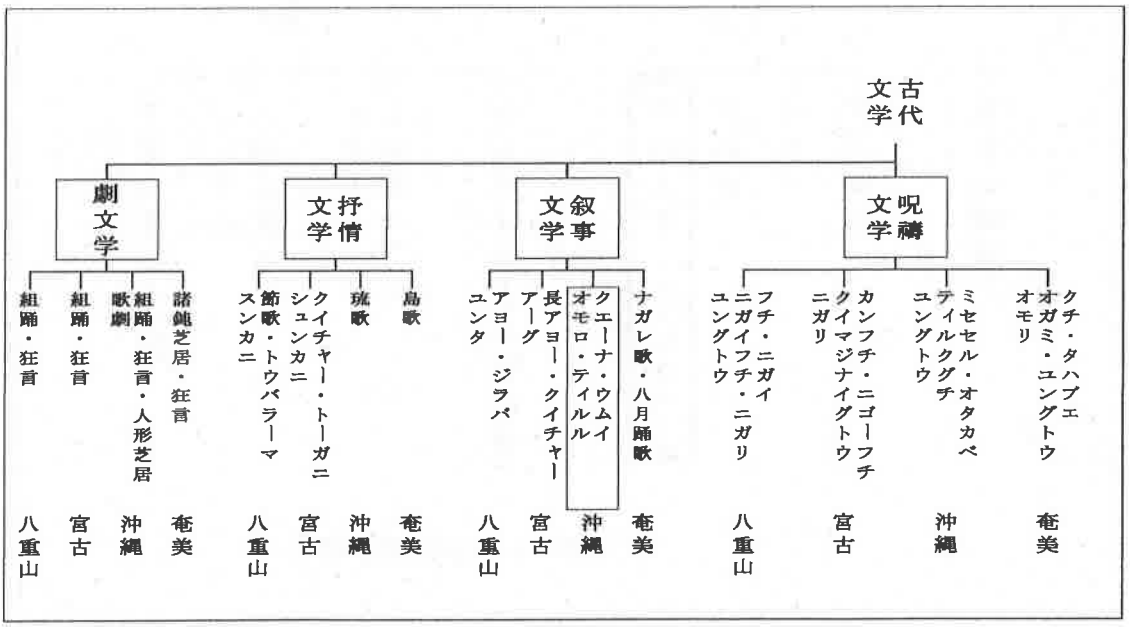
1 古謡「アマウェーダ」について

（1）アマウェーダの文学的位置づけ

外間ら[2)]は、古謡を含む沖縄文学をジャンル毎に類型化（表－1,2）し、それぞれについて、あるいはそれらの関係について解説している。その中で、「沖縄の古典「おもろさうし」は首里王府が沖縄を中心にした島々村々に伝わる神歌のクェーナやウムイなどを 3 回に渡って採録し、整理し、編集した時に、ウムイをオモロという名に呼び変えて「おもろさうし」という冊子にしたものである」「そこに採録された 1554 首（全 22 巻）の神歌だけをオモロと呼び、島々村々に古くから今日まで伝承されている神歌はウムイ、またはクェーナと呼んで区別している。ムラの神歌はウムイ、クニの神歌はオモロと理解したほうが解りやすいかもしれない」としている。さらに、オモロの周辺歌謡について「地方のウムイやクェーナなどが農耕社会の生産労働に直結して、共同体の連帯を必要とする社会構造の中から所産されているのに比べ、オモロは王を賛美し、国の安泰を願うために神を崇め、斎く思想が中心的に発想されているという点で両者にはかなりの差がみられる。そのような視点でオモロの周辺に広がる歌謡、呪詞、呪言とのつながり、さらにオモロを直接的に媒介項にして抒情的世界をひらいていったウタ（琉歌）との関係などが否応なしに視界に飛び込んでくる」とし、オモロにつながっているウムイ、クエーナなど、さらにそれらの源流をなすものと思われるミセセル、オタカベの内容に触れ、それらの文学的な位置づけを行っている（表－1,2）。

表－１沖縄文学のジャンル（その１）

（外間ら[2)]「定本おもろさうし」より編集）



ここで述べるアマウェーダの表記については、文献によって若干異なりアマーオェーダー（伊波普猷[3]）、アマーウェーダー（山内盛彬[4]）、アマウェーダ（沖縄百科辞典）等では記載されている。伊波[3]はアマーオェーダーについて、アマオヤダの転化したもの、天つ御田（みた）即ち神田（かみだ）の義としている。本論では、統一的にアマウェーダとして記載することとするが、特に原著からの引用など必要によっては原著の通り記載した。

（２）アマウェーダについて（採譜事例や解説文献から）

伊波[3]は、真和志間切敷名村を採訪、当時59歳の慶応2年生まれの老人（玉城亀と云う）が謡うアマーオェーダーをローマ字で転写し、解し易いように歴史的仮名遣に直して記載している。以下にその歌詞を記載する。

【真和志間切識名村（種子取の時のアマーオェーダー）】

①しるみきよが始(はじ)め　②あまみきよが宣(のら)て　③こしたう原下(はるお)りて

④泉口悟(いずんくちさと)て　⑤あぶしかたやにて　⑥うねぎりもしちよぢ

⑦まぬぎりも充(みちや)やり　⑧泉口(いづんぐちぐち)かねおろち　⑨角高(つのたか)かねおろち

⑩こんちゃこは溶浮(げぎう)けて　⑪真綿原(まわたばる)まゝたうゝゝ　⑫九月(くんぐわつ)も為(な)たんだう

⑬夏水(なちみじ)につけて　⑭冬水(ふゆみづ)（ん）さとて　⑮深山鶯嚠(みやまうぐいすふき)ら時(とき)をとて

⑯九年母花(くにぶばな)さらゝゝ　⑰真綿原廻(まわたばるまわ)やり　⑱人々(ひとびと)も揃(そろ)はち

⑲原々(はるはる)に配(は)ぎわたち　⑳百十日(ももかとをか)なたんどう　㉑きるゝゝに差し植えて

㉒二月(にんぐわつ)もなたんだぅ　㉓よらり草かきやよれ　㉔三月(さんぐわつ)もなたんだぅ

㉕ぬるり南風(ばえ)も和々(やは)と　㉖四月(しんぐわつ)もなたんだぅ　㉗本々(もともと)に居ちゃんだう

㉘五月(ごんぐわつ)もなたんだぅ　㉙南(はえ)の風の押(お)せば　㉚北(にし)の畦枕(あぶしまくら)しち

㉛北風(にしかぜ)の押(お)せば　㉜南(はえ)の畦枕(あぶしまくら)しち　㉝六月(ろくぐわつ)もなたんだぅ

㉞人々(ひとびと)そろはち　㉟利鎌取揃(いらなかまとりそろ)はち　㊱朝露(あさつゆ)に刈(か)りなぇち

㊲足四(あしよ)つそろはち　㊳角高(つのたか)そろはち　㊴すぢゝゝに持上(もちのぼ)せて

これらの事を比嘉実[7]は、「沖縄百科辞典（上）」でアマウェーダの歌について包括的に以下のように記述している。「沖縄の古謡の一つ。アマウェーダ（天親田）は、沖縄諸島の村々の神田で行われた田植えの儀礼で、そのさいに豊作を予祝祈願して謠われた歌謡。独立した歌謡形態と考えられる説もあるが、形態から見てクェーナに分類することも可能。 伝承・記録されたものが少なく、現在までに、浦添市西原・沢岻、玉城百名のもの 3 首が採録されている。内容はいずれも、琉球人の祖先神と考えられている＜アマミツ＞＜アマミチ＞＜アマミキュ＞で始まり、前半は、田に適する土地の選定や、畦を整えたあとに牛をおろして田を耕すことを謡う。後半は苗植え、月々の稲の生育状態、それにともなう労働の手順、刈り取り、稲積みまでの理想的展開を詳細に叙述する。アマミキョ時代の稲作の祖型を反復することによって稲作の豊穣を獲得しようとする呪術的心情に発した幻想的叙事歌謡である」としている。

さて、アマウェーダが歌われていた地域について伊波[3]は「沖縄本島ではどの部落でも謡われるもの」とし、比嘉[7]はアマウェーダ（天親田）が沖縄諸島の村々で行われたとしており、稲作中心であった地域では同様な古謡が謡われていたことを述べているが、その詳細については記述してない。

外間[6]らは「南島歌謡大成 I 沖縄篇（上）」で、「浦添市西原・沢岻、玉城村百名・仲村渠の他に、沖縄本島では豊見城辺（田の祝いの歌）、真和志間切識名村（種子取の時のアマーオェーダー）、東村平良（田ぬうむい）、国頭村安田（田の祝いのクェーナ）、国頭村比地（天人の教）、などが見られる。その他、伊是名村、伊平屋村には田植えの儀礼を歌たった歌謡（ティルクグチ）が多数見られる」としている。

旧暦月や祭祀の種類毎に詳細に解説した「やんばるの祭りと神歌[8]」の「2、3月田植え時の神歌」の章で中鉢良護氏は、田植時の儀礼に限定されない、いわゆる稲作儀礼の各段階に関連する儀礼の痕跡がみられるウタカビ、ウムイ、クウェーナのいくつかが記録されているとして、それらを「アマウェーダ系歌謡」として新たな枠組みを提示している。その上で、いくつかの特徴を持つ歌謡をアマウェーダ系歌謡と定義している。さらに、それは、「①歌の冒頭で、「アマウェーダー（天の親田）を創始した「アマミキヨ（アマミコ、アマンチュ）」また、「シルミキヨ（シルミコ、シルンチュ）」に言及していること。②田づくりにはじまり、収穫後の収納、またはその後の祭りでの神酒づくり、貢納まで、稲作の現実に即した順序を丁寧にたどる展開をとること。③さらに、稲作の写実的描写は、単にその順序のみでなく、数字の裏付けを持って説明されている。」とし、さらに具体例を挙げ「例えば「夏水につけて、冬水に（さ）とって」というように、歴のうえの立冬を種子播きの基準にしたり、月ごとの作業や稲の生育の様子を明示しているのである。また、「百十日になりば・・・」という表現には、苗代に播いてから百十日ころの苗が丁度植え時であるという経験的知識が表されている。これらは、各種の農書に見られた近世半ば以降の実践的な知識であり、こうした点が「アマウェーダ」に見られるのは、その成立年代を

としている。

ミントン[10]によると、「1987年に発足した仲村渠祭祀委員会では沖縄開闢の祖アマミキヨのミントングスクや稲作の発生に関する親田御願（ウエーダウガン）など民俗学的に非常に貴重なものがあり、それが区民にとって心のよりどころであるとともに誇りにもなってる。」として「後世にこれらの重要な部落の祭祀が受け継がれることを願いつつ、年配の方々から聞き取り調査を実施し、祭祀行事についての記録と、行事を古式に近い形に復活する努力をしてきた。」としている。アマウェーダが歌われる親田御願の実施期日（旧初午の日）、御願所（米地・受水送水・御穂田・祝毛）、準備（ビンシー・ヒチジ・酒・生豆腐・重箱・敷物）の外御願手順が記録されている。

以下の写真は、筆者が平成25年2月21日（旧初午の日）に実施された親田御願を視察した際の写真の一部であるが行事の全過程を見ることができたかは不明であるがその一端を以下に記載した。

午後2時頃、公民館の拡声器からアマウェーダの歌が流され区民に行事の開始が告げられると区民が静かに集まり、乗合で最初の御願所である米地に移動し、親田御願が始まった。当日は、親田での拝み・田植えの儀式・祝毛での四方拝などを見ることができた。主催者の区民の大人、多数の小学生や区民以外の多くの参観者が見られた。

また、現在は、その伝統行事はかなり省略されているとされているが、本県マスコミ関係者、本土企業の雑誌編集者、県内の参観者等多数見られ古くから伝わる伝統行事として報道されている。後日、筆者は、親田御願の際に活用されているアマウェーダの音源をＣＤから録音させてもらった。

【玉城仲村渠の天親田（あまーうえーだー）<ミントゥンのクウェーナ>】

①天人（あまみつ）が始ぬ　②浦田原巡（うらたばるみぐ）ぐやい　③泉口悟（いずんくちさと）やい

④湧（わく）ぬ口悟（さと）やい　⑤縦溝割（たていみずわ）い開（あき）きてぃ　⑥横溝割い廻（ゆく）わち

⑦畔型造（あぶしかたつく）て　⑧桝（ます）ぬ型据（かた）いてぃ　⑨足高（あしたか）んうるち

⑩角高んうるち　⑪苦土（くんちゃ）やちぢいしてぃ　⑫甘地（あまちや）やきぢ浮きてぃ

⑬夏水（なちみじ）に漬きてぃ　⑭冬水に下るち　⑮百（むむ）とぅ十日（とうか）なりば

⑯しんぬ田原（たばる）に播種（さしう）いてぃ　⑰しじししゃとぅ引き分てぃ⑱桝（ます）ぬ型（かた）に播種（さしう）いてぃ

⑲植いてぃ三日（みっちゃ）や　⑳白ふぃぢんさすい　㉑ゆらい草掻ちゃい

㉒三月になりば　㉓まだら南風（ふえ）ん吹（ふちゆ）い　㉔四月になりば

㉕しだら南風（ふえ）ん吹（ふちゆ）い　㉖五月（ごんぐわつ）になりば　㉗繁（しぢ）々とう盛（も）い上てぃ

㉘北（にし）風ぬ吹きば　㉙南（ふえ）の畔（あぶし）枕　㉚南（ふえ）ぬ風ぬ吹かば

㉛北ぬあんだ枕　㉜六月がなりば　㉝大鎌（うふいらな）うたさい

㉞しかまん人雇（ちゅやとう）てぃ　㉟朝や苅い干さい　㊱夕暮（ゆすくい）や持上げてぃ

㊲あんされやゆみ数い　㊳大親雲上（うふやくみ）や　㊴算取（さんとう）やい

㊵あんさりぬ好みぬ　㊶甘み酒汲ん呑まち　㊷大親雲上（うふやくみ）好みぬ

㊸辛酒吸ん呑ち　㊹四又お倉に　㊺積み余ち

㊻八俣（やちまた）お倉に　㊼積み余ち　㊽大屋の縁まで

㊾積み余ち　㊿あしゃぎぬ端までぃ　(51)積み余ち

(52)大（うふ）ま積んいしてぃ　(53)中盛（なかほ）らち給（たぼ）り

うへーさびたんどぅ　スーライ　サーユカロー　ユカロー　スーライ　サーユカロー　ユカロー

【浦添間切沢岻村のアマーウェーダー】

＜謡の記載方法＞
1行目：謡句番号　原謡（山内[1]の記載通り）
2行目：沢岻で歌われていたとする歌詞の読み（カタカナ表記）
＊は囃子　（ アマウェーダーヨー　米(クミ)ヌワーチャーガユイ ）
a ma whe da yo　ku mi nu wa cha ga yui
3行目：歌詞をローマナイズで一音ずつ区切った読み

①あまみちゅがはじみぬ
アマンチュガ　ハジミーヌ　＊　（歌意）アマミク神が始めた
a ma n chu ga　ha ji mi nu

②しらみちゅがのたての
シランチュガ　ヌダティヌ　＊　シラミク神が口上した
shi ra n tyu ga　nu da ti nu

③くしとう原巡ぐやい
クシトウバル　トンミグティ　＊　くしとーばるをあっちこっち行って
ku shi too ba ru　tu n mi gu ti

④泉口さとぅやい
イジュングチ　サトゥヤイ　＊　泉が湧き出るところをつきとめて
i jyu n gu chi　sa tu ya yi

⑤あぶしかたやにやい
アブシカタ　ヤニヤイ　＊　畦(あぜ)（土手）を造り回らし
a bu shi ka ta　ya ni ya yi

⑥なさきゃらやなちょけて
ナジチューヤ　ナジキティ　＊　ナージチューでさそって
naa ji thu ya　na ji ki ti

⑦角たかにこめあけてぃ
チンダカニ　クミアギティ　＊　牛に踏みたがやさせて
chi n da ka ni　ku mi a gi tii

⑱二月がなやぅれば
ニングァチガ　ナユリバ　＊　二月になったら
ni n gwa chi ga　na yu ri ba　（次の句欠落？）

⑲三月がなやぅれば
サングァチガ　ナユリバ　＊　三月になったら
sa n gwa chi ga　na yu ri ba

⑳若々とはがしやぅな
ワカワカト　ファーガスンナー　＊　青々と葉が茂り
wa ka wa ka tu　faa ga su n naa

㉑四月がなやぅれば
シングァチガ　ナユリバ　＊　四月になったら
si n gwa chi ga　na yu ri ba　（稲の穂が出始めの頃）

㉒こきゃら南風も吹あけて
クチベーン　フチアキティ　＊　東南の風が吹いて
ku chi bee n　fu chi a ki ti

㉓五月が なやぅれば
グングァチガ　ナユリバ　＊　五月になったら
gu n gwa chi ga　na yu ri ba　（稲の穂が熟する頃）

㉔こはいろにもきゃあげて
クバイルニ　ムチャギティ　＊　黄金色の穂になって
ku ba i ru ni　mu cha gi ti

㉕神あしゃげげらやい
カミアサギ　ギレーヤーイ　＊　神アシャギを造り？
ka mi a sha gi　ge re yaa yi

㉖をぅない神めんかい
ウナイカミ　メンカイ　＊　うない神様に
wu na i ga mi　me n ka yi

㉗ふさちとぅてぃおしゃけてい
フサチトティ　ウサギティ　＊　初穂をそなえて
fu sa chi tu ti　u sa gi ti

㊳てぃしまてもつんあぎてぃ

ティシマディン　チンアギティ　＊　縁側までも積み上げて

ti si ma ti n　chi n a gi ti

㊴八かや田の主ややのや十かや

ヤカヤタヌヌシヤ　ヤヌヤトカヤ　＊　八苅(やかい)の主は来年は十苅(とかい)て

ya ka ya ta nu nu shi ya　ya nu ya tu ka ya

上記の歌詞を、稲作作業の行程として類型化してみると大まかに以下のようにまとめることが出来る。①・②句で稲作を導入した祖先神について感謝し、③・④・⑤句で稲作の土地（適地）を探し田の作り方をのべる。次に、⑥・⑦・⑧句で牛耕による整地・土作りの方法、⑨・⑩・⑪・⑫・⑬句で種籾から強い（良い）苗を作るための処理方法を述べ、⑭・⑮・⑯・⑰・⑱・⑲・⑳・㉑・㉑句で田植えの時期とその後の苗の成長の様子を日を追って謠う。そして、㉓・㉔・㉕・㉖・㉗・㉘・㉙・㉚句は、収穫時期の稲の状況と収穫に向けた準備について、㉛・㉛・㉜・㉝・㉞句は刈り取り作業と畑で干す作業を謠い、㉟・㊱・㊲・㊳句は倉や屋敷のあちこちに積み上げて保存し、最後に㊴句で、次年の更なる豊作を祈願（予祝）する。⑫・⑬句については、次に続く句が欠落していることも考えられるが、あえて私見を述べると田植えに適した苗に育つまでの間に、苗代の稲の根に酸素を供給するため泉口からの水を３日、あるいは７日間切ること（下ぎやい）の意に解したいが、文献調査に基づく今後の課題としたい。このように、沢岻のアマウェーダも長い間の経験知に基づき、作業日程が明確であり、理にかなった稲作の手順を謠っている。その意味では、当時、稲作の方法を伝承するに十分な謠であった思われる。

第１句

第２句

第３句

第４句

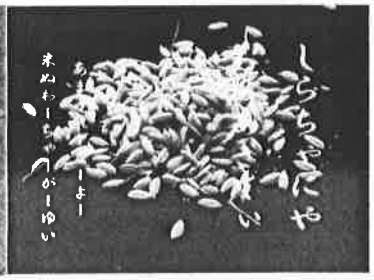
第５句

第６句

第７句

第８句

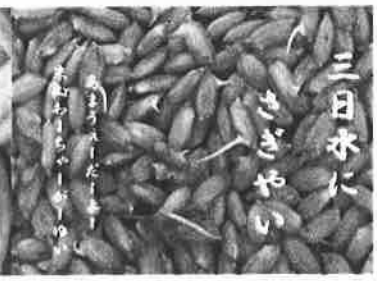
第９句

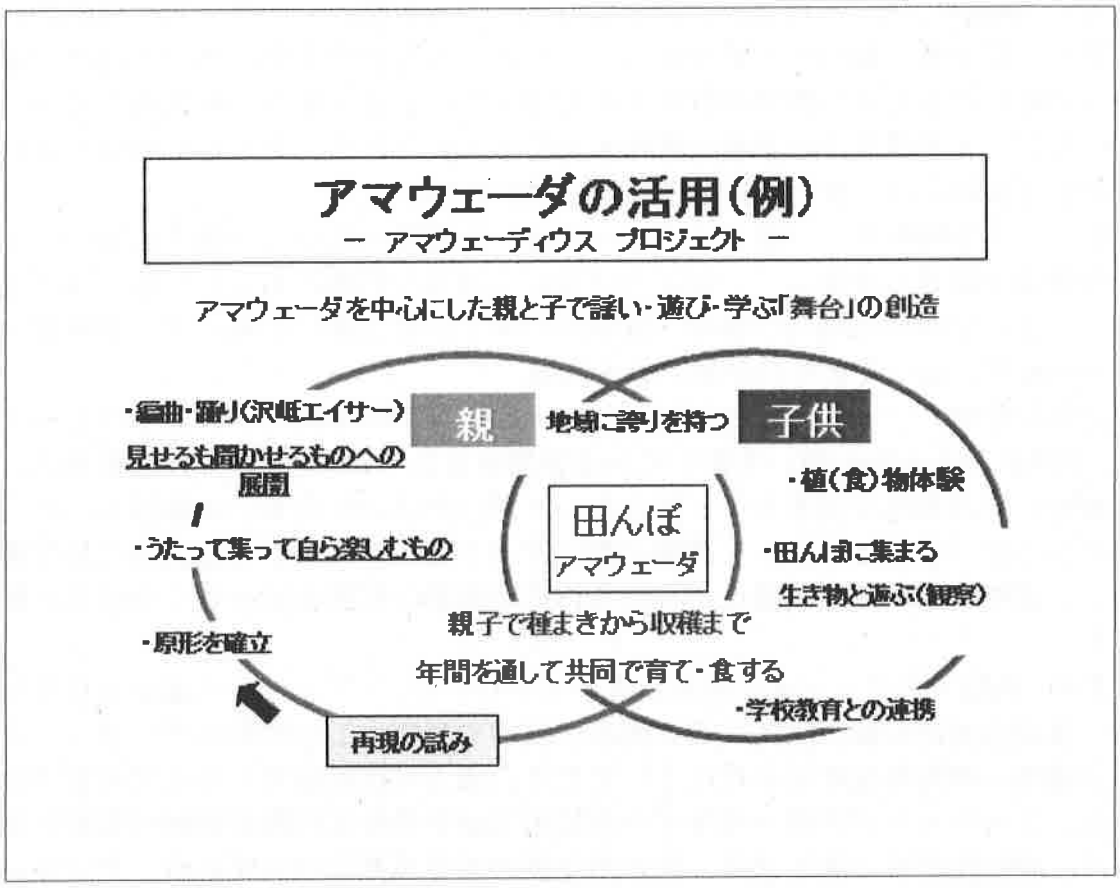


第１０句

第１１句

第１２句





図－１０：「田んぼ」を中心としたアマウェーダの活用例

参考文献

１、沢岻字史編集委員会編「字史たくし」1996
２、外間守善・波照間栄吉編著「定本おもろさうし」角川書店
３、服部四郎・仲宗根政善・外間守善編「伊波普猷」平凡社
４、山内盛彬「琉球王朝秘曲の研究」：山内盛彬著作集　第２巻
５、池宮正治・高江洲義寛「解題：琉球王朝古謡秘曲の研究について」
　山内盛彬著作集　第２巻
６、外間守善・玉城正実美編「南島歌謡大成Ⅰ沖縄篇（上）」
７、沖縄タイムス社「沖縄大百科辞典（上）」
８、名護市教育委員会「名護市史叢書・15　やんばるの祭りと神歌」
９、崎原恒新「ハンドブック沖縄の年中行事」沖縄出版
１０、字仲村渠祭祀委員会「ミントン」文進印刷株式会社
１１、浦添市史第六巻資料編　第５篇
１２、泉 恵得「琉球古謡の多層性への一考案」日本声楽発声学会誌(29)

てだこ市民大学

卒　業　研　究

学部名：文化振興・教養学部
氏　名：知　名　正　男

1.テーマ　沖縄戦：前田高地の戦いと前田住民

2.主題設定の理由

前田は、浦添グスク東南、小湾川及び沢岻川上流の標高８０～１２０ｍの比較的平坦な丘陵地に位置し、集落はその南側に立地している。グスクの懐に抱かれた、グスク前の田圃という意味で前田の名がついたとも言われる。１７世紀中頃の資料では約９割が水田と記録されていて、水に恵まれた地域であることがわかる。

９０歳代・８０歳代のご夫妻に前田の戦前のことをお聞きすると、豊かな自然に恵まれ、米・イモ・果物等が豊富で、正月は豚料理で祝い、８月の十五夜には昼は綱引き、夜は特設の舞台で村芝居、組踊り、前田棒等夜遅くまで楽しんだと言う。その話からその頃の前田集落がのどかで平和、豊かな文化に恵まれたところだったことが伝わってくる。

豊かな文化は、のどかで平和な国・地域からしか生まれない。その対極にあるのが戦争である。その戦争の悲惨を知り、いかに平和が大切であるかを確認することが、きな臭い匂いがうっすら感じられ始めた、今こそ求められている。文化振興の原点、出発点は平和にあると考える。そこから文化が生まれる。

その悲惨な戦闘が６９年前にここ前田で行われた。しかも激戦であった。４月１日に本島読谷村の渡具知海岸に上陸した米軍は、本島を南北に分断する作戦をとった。前田高地は東西南北の方向に対して展望がよく利き、米軍の動きや軍司令部がある首里高地も見え、首里の正面防衛の第一線であった。従って、仲間高地に連なる前田高地の確保は、日米両軍にとって沖縄戦の天王山となる地であった。ここでの戦いは、高地の南のなだらかな斜面にある前田集落の住民にも甚大な被害を与え、多くの犠牲者が出た。戦闘が激しくなるさなか、部落に留まるか、南部に避難するか、のいずれかの決断をした家族は何れも多くが辛酸を舐めることとなった。

前田の住民の悲惨な戦争体験を記録することは、体験者の高齢化もあり時間的に切迫している。「聞き取り」を通して、苦労された方々の記憶を共有し、後世に伝えることは地域に住む者の務めだと思っている。その「聞き取り」をするのは、現在前田に住んでいる私が最適だとの思いから、この主題を設定した。

3.前田高地の戦いの概要・諸統計資料・体験者の聞き取り、手記

（１）前田高地の戦いの概要

（２）沖縄戦の浦添村と前田に関する諸資料

（３）聞き取り調査内容

（４）体験者の手記

（５）終わりに

４月２５日、米軍は日本軍陣地があると思われる地域に、砲弾や空爆の猛攻撃を行った。一連隊の作戦区域だけで1616発の砲弾、空からはナパーム弾で、丘陵一帯を焼き尽くした。

４月２６日、前田高地攻撃が開始された。進撃にそれほど困難はなかったが、丘の頂上にたどり着いた途端、日本軍の攻撃を受け、１８名の犠牲者を出してしまった。前田断崖の日本軍は反対側斜面を利用した彼らの防御技術を完全に利用した。前田高地での日本軍の防衛戦術は、完璧そのものだった。丘の前面はまもらず、相手を容易に登らせ、頂上までのぼりつめたところで猛烈な攻撃をあびせる。米軍にとって、峰の上と反対側の丘腹は、“禁じられた地域”になってしまったのである。

為朝岩（米軍呼称「ニードルロック」）では、人間はしごを作って丘陵のいただきに登ろうとしたが、最初の３名が頂上に達するやいなや、機関銃で射殺された。為朝岩では、頂上に上がるたびに日本軍の機関銃掃射を浴びて排除された。日没直前に、丘150鞍部にある前田の幾つかの小山を占領しようとしたが、一度小山に登った兵士たちは１ダースもの機関銃で掃射され、たちまち２人が死亡し、６人が負傷した。煙幕弾で、夕やみの中撤退した。

さらに東で、丘150、152に登り、低地に600人ほどの敵を発見、殺害した。戦車と火炎放射装甲車は前田断崖の端に移動し、大損害をもたらすことができた。多数の敵兵が火炎放射によって洞穴から追い出され、逃げるところを撃たれた。この日の丘150と丘152の頂上と反対側斜面におけるこの行動と装甲車の前田への侵入は、第３２軍司令部に直接の強烈な影響を与えた。午後16時に牛島中将は簡潔な命令を発した。

戦車を伴った敵部隊は13時から前田の南と東地域に侵入しつつある。第62師団は一部の部隊を派遣せよ…前田に侵攻しつつある敵を攻撃し、徹底的に反撃することを期待する。

同じ時間に、隣接していた第24師団は、師団境界を無視してこの戦いに協力するよう命令された。２時間後、指揮している日本軍司令官は別の命令を発した。「わが軍は前田近くを突破した敵を撃滅せよ。第24師団は今夕、首里北東に主力を配置せよ。」この命令で、第96師団が連続４日間でわずかしか掌握できなかった第一の理由を見ることができる。日本軍は前田で持ちこたえようとし、また、それを実行した。

４月２７日、断崖左の南西に鋭く曲がっている高地の角で、第３８１連隊の第１大隊と第３８３連隊の兵士たちは、１５０高地（日本軍呼称「１３０m閉鎖曲線高地」現・浦添市消防本部裏手）と１５２高地（日本軍呼称「１３５高地」現・国家公務員宿舎前田住宅所在地）の間の鞍部を抜けて自分たちのやり方で戦い、第７６３戦車大隊の戦車と第７１３連隊の火炎放射装甲車で支援された。戦車・歩兵戦闘チームは、彼らが何時間も大虐殺に従事したことである。戦車と火炎放射装甲車は日本軍陣地を焼き払い吹き飛ばし、何百人もの日本兵を地下陣地から追い出し、そのあと歩兵によって、あるいは戦車の機関銃によって、止めを刺した。戦車と歩兵は前田の南端に進撃したが、そこで歩兵は敵の火力に阻止された。断崖の上での全力をあげた戦いで別々に分かれたＦ中隊とＧ中隊は、大きな地下塹壕を制圧しようとしたが、この企ては失敗した。多くの日本兵が死んだが、１５０高地と１５２高地近くの前田ではほんのわずかの前進を除いて、この日、最終的に勝って確保した土地はなかった。

＜弁が岳から前田高地へ向かう。前田への進出経路を宜野湾街道直進と提案（友人の宇良永吉は沢岻経由の迂回案を提案）。弁が岳から首里鳥掘を経由して首里教会前・当之蔵を通り儀保へ抜け、ワイトゥイ（割り取り）と呼ばれた切通しを抜けて平良へ入る。平良で石嶺方面へ直進する自分の部隊と大名から沢岻へ抜ける宇根永吉の隊に分かれる。石嶺の手前で左折して目的地の高地に向かう。第２大隊高地攻撃するも失敗＞

浦添村前田陣地の戦闘

前田高地の断崖を登る米兵

割れた為朝岩

発掘された墓地

5月4日未明、総攻撃は開始された。第３２連隊の攻撃には日本軍の砲兵、戦車も支援したが攻撃は失敗した。戦車隊は首里付近で全滅したらしい。夜に入っても攻撃を繰り返し、13、000発以上を発射することができた。日本軍は軽飛行機を阻止するため、主として７５ミリ高射砲と大砲を発射し、発射の閃光を隠すために発煙筒を使用した。この賭けは高価な失敗となったことが判明した。援護している日本軍高射砲手を駆逐するために発射された弾幕で覆われた地域を利用することによって、米軍の軽飛行機は、正確に多くの日本軍砲台を集中爆撃することができた。この日、米軍の反撃は１９か所の日本軍砲台を破壊し、翌２日間に４０か所以上を破壊した。それゆえ、日本軍は残りの兵器を洞窟に引っ込めた。日本軍の放火の減少とともに、米軍部隊の戦闘疲労者の多くがそれに応じて減少した。この日の飛行機による日本軍の奮闘は大いに成功した。前日夕方から４日夕方までに、日本軍の飛行機は 17 隻の米艦艇を沈没か破損させ、682 人の海軍の死傷者を出し、その間に米軍の空爆と艦砲射撃で日本軍の飛行機１３１機が撃墜された。日本軍の空からの攻撃は、米軍に対する絶え間のない襲撃を一機で行う単純なもので、4月1日から5月17日までに、228機による560回の急襲を数えた。＜第１大隊（隊長伊東大尉）は、棚原高地に進出し高地を奪取したが、第２大隊（隊長志村大尉）の前田高地攻撃は再び失敗した。４日の前田付近の戦闘は激烈だった。私（外間守善）は手榴弾で応戦していたが、標的など定めようもなく、やみくもに敵のいるほうへ向かって投げつけるのが精一杯だった。爆雷の凄まじい爆風に幾度となく地面に叩きつけられた。それから間もなくに私は壕口での手榴弾戦で、右手右足に小銃弾、手榴弾の破片を受けて負傷、大隊本部壕に担ぎ込まれた。第２大隊の兵は、５日間一度も寝ないで戦ったあげく戦死していった。＞

5月5日、前田高地中腹の日本軍弾薬集積壕が爆発した。幾百という高地の岩の割れ目から白い煙が吹き出し、日本兵が飛び出した。最後の反撃だった。米兵は狂気に襲われ、頂上はパニックに陥った。前田高地の戦いは終わった。日本軍の死体3、000人が認められた。

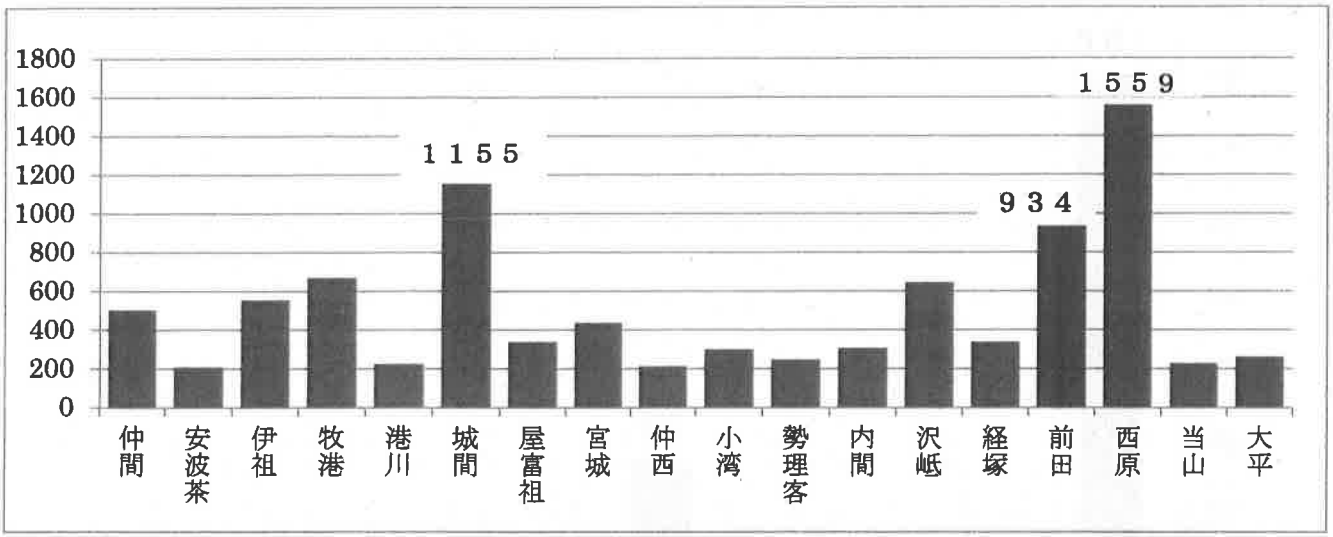
5月6日、アメリカ軍は前田高地の戦闘終結を宣言し、７日経塚・勝山に兵を進めた。前田高地はまさに「一度出撃したら二度と戻ってこられない“魔の高地”」（日本軍）、「サンタンヒル、ありったけの地獄を一か所に集めた戦場」（米軍）であった。

6日以降について、外間守善著『私の沖縄戦記』では次のように書いている。

＜**6**日には、前田高地は完全に米軍に制圧され、この日、米軍は、仲間・前田高地の戦闘終結を宣言した。志村大隊、賀谷大隊は別々の洞窟に閉じ込められる状況となり、朝7時から夕方6時まで執拗な小銃、手榴弾、爆雷攻撃を受けた。武器弾薬も底をつき、戦える兵士も激減した志村大隊は、昼間はじっと耐えるしかなかった。そして、夜になると負傷者の手当て、生存者の確認、索敵斥候を出し、洞窟を出て米軍の幕舎を襲った。7日には、米軍は勝山ー経塚の陣地に総攻撃を開始した。**7**、**8日**、両大隊は、洞窟陣地から夜襲だけの戦闘で苦戦だった。米軍は攻撃を繰り返したが、壕には侵入してこなかった。**9日**、賀谷大隊は脱出命令を受け、大損害を受けながら経塚から石嶺方面に脱出した。志村大隊も脱出することになり、先発隊の一部は脱出できたが、最後尾についた大隊主力は待ち伏せ攻撃を受けた。私は洞窟内の負傷兵の後始末を命じられて最後に洞窟を出た。洞窟に残るよう指示された負傷兵たちは異常に気づいたのか、歩ける者は皆洞窟を出ようとした。手を怪我した者は足を怪我した者を背負った。他にも這いずって脱出しようとする者、泣き叫んで連れて行ってくれとせがむ者など騒乱の洞窟に化した。私に後事を託した古謝衛生兵は、バケツに入った水

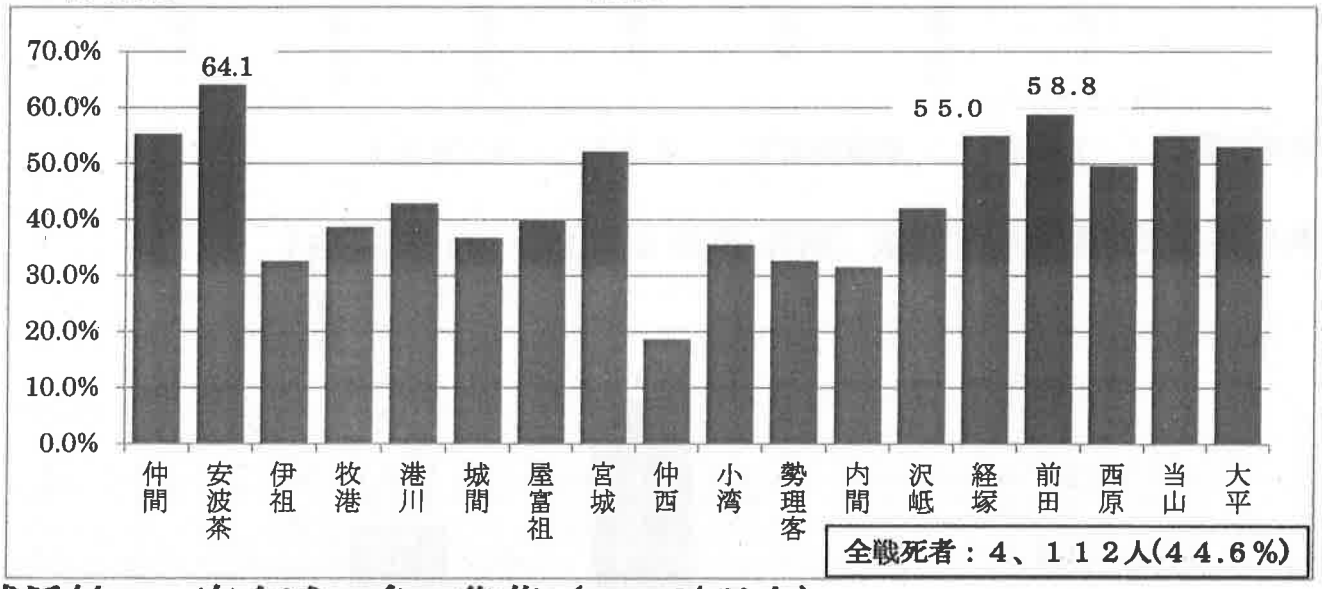
（２）沖縄戦の浦添村と前田に関する諸資料

浦添村各集落の人口（沖縄戦＜昭和２０年＞当時）　浦添市史　戦争体験記録第５巻資料編

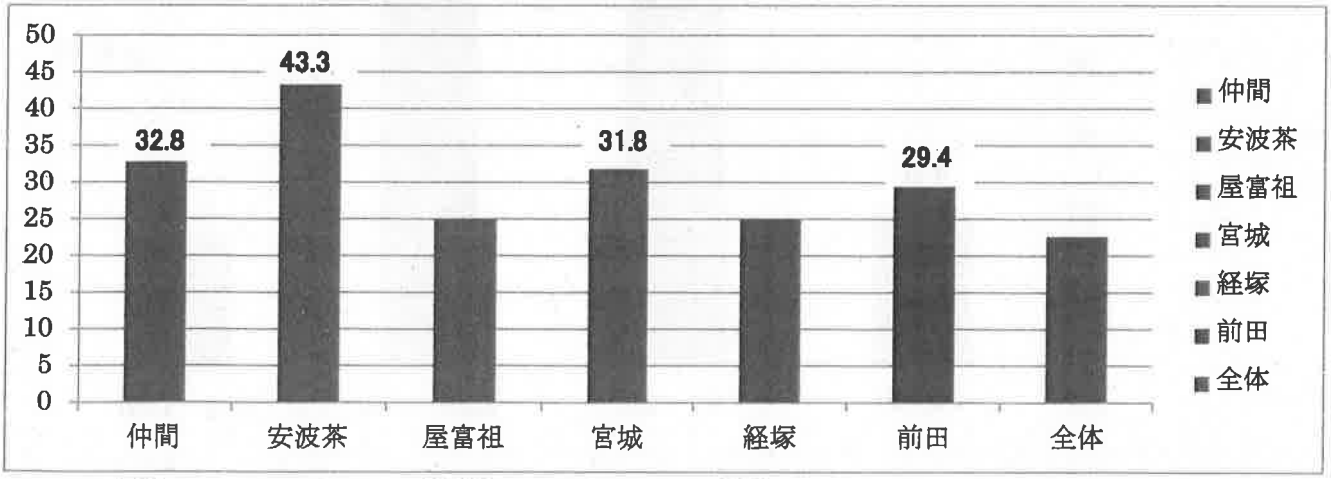


※全人口　９、２１７人（沖縄戦当時、浦添を生活の拠点としていた人達が調査対象者）

浦添村各集落の戦死者数の割合（沖縄戦＜昭和２０年＞当時）



浦添村の一家全滅の多い集落（２５%以上）



※一家全滅とは…県内にいた家族が全員死亡した場合。

浦添市史　戦争体験記録第５巻資料編

（３）聞き取り調査について

平成２５年７月頃、浦添市てだこ市民大学の伊徳清包事務局長名で前田自治会長・老人会（前田かりゆし会）長宛ての「聞き取り調査に関するご協力願い」の文書作成をお願いした。最初に３名の方に自治会館に集まっていただき、お話を伺った。その後は、私個人のつてで文書を渡してお願いし、聞き取り調査を実施した。

前田住民の中には、前田高地の戦闘が激しくなるなか、なお部落に留まることを決断し留まった方々、南部に避難することを選んだ方々がいた。１０名を超える方々からお話を伺ったが、どちらかと言うと、南部に避難された方々の苦労、悲惨が大きかったように感じた。南部に逃れた方々は、弾雨に追われ、命を奪われる者、命ある者も戦場を彷徨する中で食べるものもなく栄養失調で体力を消耗し、戦場を生き抜いても収容された各収容所で命を落とす者もいた。前田住民の戦死者は、浦添村内で１５８人、首里、真和志含む南部で１７０人、収容所で死亡した方が３７人もいる。

聞き取り調査するなかで、「４、５年前に孫が戦争体験を聞きに来たことがあり、いざ話そうとしたら急に動悸が激しくなり、涙が止まらず。話せないと断ったが、今なら話せる。話を聞いてくれる人があれば、いくらでも話したい。」と言ってくれた言葉に意を強くした。

それでは、前田に留まられたＨ・Ｓさん家族と南部に避難されたＩ・Ｙさん家族のことを紹介したいと思う。

前田に留まった…Ｈ・Ｓさん（昭和１４年生、男性）からの聞き取り

６名家族、父、母、長姉、次姉、本人、妹

父は防衛隊に取られ、母は子供を失ったら夫に申し訳ないと子供を守るため、自分の故郷今の北谷町謝苅の実家に家族５人で避難した。ところが、Ｓさんが母の実家の近くで友達と遊んでいて、井戸で水を飲んでいたところ、突然米軍の軽飛行機（グラマン機）が現れ、機銃掃射され慌てて近くの藪に逃げ込んだ。それでも不安で防空壕に走り込み、事なきを得たことが脳裏に強く刻まれているという。

これは大変だと、家族は前田に戻ることにし、北谷から前田目指して出発。長姉と母が妹を背負い、むずかる次姉の手をとり、Ｓさんは黙々と歩いたという。牧港にくると橋は崩壊、道路側に松並木の松がすべて倒れている。そこの木の下をくぐり抜けたり、上を越えたりして、やっと前田に到着。前田の茅葺の自宅は現２４１号線（当時は普天間街道）の近くにあり、背後の岩下の防空壕に落ち着くが、砲弾の着弾があり、危ないと判断して、現グリーンハイツ付近の自分たちの先祖墓の骨壺を外に出して、墓入口に木や木の葉、草をたてかけて避難。そこの墓は北向きであったので、この向きの墓には北から攻撃する米軍の砲弾が盛んに飛んできた。危険を感じて反対側の南向きの親戚の墓に移動。そこで親戚の２家族と合流、３家族十数人で隠れていた。ここから近い南には、日本軍のトラックが隠蔽できる壕があった。この壕は戦後も壊れずに残り、トラックも残っていた。前田の住民がトラックの外装を

求める声だよ」と聞かされた。戦争最中で皆逃げ回るのに必死で、壕口を開けることも叶わなかったのである。夜は歩き通しで、歩きながら眠っていて、いつの間にか違う場所に着いていたことが何度もあった。梅雨時期とも重なり、移動に難渋した。南部への逃避行は目的地があっての移動ではない。弾丸の届かない安心の地を求めての移動。南部をさ迷っていたとの表現がぴったりである。従って、着いてみたら、何日か前と同じ場所ということもあった。国吉、真栄里の地名も大人が口にしていたのを覚えている。壕に入ることを断られたこともたびたびであった。

真壁村新垣の森の木の下に隠れていた時、砲弾が直撃して祖父と長兄が即死、妹と母と私も負傷した。何日か経って妹も死んだ。母は、１週間ほど苦しんだあと息を引き取った。私は、肩に破片が入っていたが、次兄が「皆死んでしまった。きょうだいは２人だけだ。お前は死んだらいかんようと、泣きながら私の肩に食い込んだ破片を竹の棒で取ってくれた。自分も泣きながら痛みを堪えた」。生き残った次兄と私では家族の亡骸を埋めることができず。しばらく亡骸はそのままであったが、防衛隊の方が埋めてくれた。亡骸と一緒の時は、いろいろと大変であった。戦後何年か経った後、祖父、母、長兄、妹４人の亡骸を埋めた場所を探し当て、胸に抱きしめ故郷前田に連れて帰ることができた。

母が亡くなった翌日に米軍に保護された。後１日早く保護されていたら母の命も助かったのにと思った。家族で生き残ったのは、長兄と私と６カ月の弟の３人であった。その弟も保護された時、米軍が抱きかかえてどこかに連れて行ったまま二度と会うことはできなかった。きっと、どこかで生きているものと思っている。

多くの保護された人たちはトラックに乗せられ海に向かった。トラックの大人たちが自分たちは海に投げ込まれると思い、皆泣いていた。海にくると船に乗せられ北に移動。自分達２人は身内がいないということで中部の孤児院に預けられた。何日か経過して、その孤児院にいた２人をおばさんが迎えに来て、集落の方々の収容されている収容所で合流できた。

戦争、それは悲惨極まりないもの。人間を人間でなくするのも戦争。二度と再びおぞましい戦争があってはならない。

私は、今明るく生きている。亡くなった家族の魂を抱えて、底抜けに陽気に生きている。亡くなった家族の分まで力強く生きようと願っている。世界の恒久平和、沖縄のチムググルを心に刻みながら…。

こなかったよ。

昭和２０年の三月、四年生の終業式の日。みんな学校に集まる日でみんなに会えるのを楽しみにしていたが、その日の朝から沖縄は大きな戦争になったよ。それで、お父さんは防衛隊にかりだされて、まだ１６歳のお兄さんは、学徒隊として戦地にかりだされたよ。とうとう、戦争も激しくなり、敵が前田の近くまで攻めて来たので、家族と親戚は南部の方へと避難する事になったんだよ。

おじいさんは、５歳のフジコ（妹）をおんぶして、おばあさんは二年生のセイソウ（弟）の手を引いて、母ちゃんは少しの荷物と１歳になった妹のケイコちゃんをおんぶして避難する事になった。

けれど、避難する時になっておじいさんとフジコは家族からはぐれて行方が分からなくなってしまった。

前田の山を越え石嶺の近くに来たとき、兵隊さんが一人二組になってきりこみ隊へと向かっていた兵隊さんが、「敵は近くまで迫っているから、気を付けて避難するんだよ。」と言って、ハッちゃんの頭をなでてくれた。いま思い出すと、兵隊さんは家族の事を心配していたと思うよ。その後に、学生さんにあった。学生さんは黙って頭を下げて過ぎ去って行ったよ。たぶん、もう一度家族と会ってから死にたかったんだと思うよ。あの寂しそうな姿が、今でも頭から離れる事はないんだよ。

昼は飛行機がとんでいるので、夜の道を村から村へと避難していたよ。忘れもしない与座岳の近くのほら穴にたどり着いた。次の日みんな食べ物を口にしていないから、水だけでも飲まないと生き延びる事ができないからと言って、母ちゃんはケイコちゃんをおばあさんに預けて、親戚のおばさん３人と水くみに行くのをハッちゃんは、「水飲まないでもいいから。」と言って泣きすがったが、母ちゃんは「ハッちゃん大丈夫よ、心配しないで」と言って、止めるのも聞かないで出て行ってしまった。しばらくしてから、一人のおばさんは額にケガをしてもう一人のおばさんはケガをしていなかったが、ハッちゃんは「母ちゃんどうしたの」と言っても返事がなかった。ハッちゃんは「母ちゃん母ちゃん」と叫びながら外に出ようとしたら、おばさん達が「危ないから出たらダメだよ」と言って止められた。おばあさんとハッちゃんと弟三人は気が狂ったように叫んでも母ちゃんは帰らぬ人となってしまったよ。母ちゃんが死んだ夕方は、天も悲しむかのように大雨が降って、洞穴に水が入ってきたので次の隠れ場所を探して、どろんこの山道を雨の中、弾の中ハッちゃんは妹をおんぶして泣きながらさまよい歩いていたよ。しばらく歩くと、大きな防空壕が見つかって、おばあさんが「ヌチヤタシカタンドー」命は助かったと言ったので、皆ホッとした。防空壕の中に入っていったら、奥の方から兵隊さんが出てきて、「皆ここから出て行きなさい。」と言われ、おばあさんが「お願いです、この子達を助けて下さい。一晩でもいいから」と言って、ひざまずいてお願いしたが聞いてくれなくて出されてしまったよ。

ゆうた、けんさく「戦争は大変だよ。人の心を傷つけてしまうからね。小さい傷は消えるけど、大きな傷はいつまで経っても消える事はないんだよ。でもね、防空壕に入れてもらえ

怖い飛行機からの爆弾、船からの艦砲射撃、また陣地からの高射砲、機関銃から逃れて静かな所に来て、夢でも見ているのかと思っていたよ。

糸満から海上トラックに乗せられ、その中には海ですてられるかもしれないと言って、泣いている人もいた。だけどアメリカの兵隊さんは優しくて、缶詰やチョコレートをあげていたので、ハッちゃんは殺すはずがないと思っていたよ。上陸した所が北谷だったと思う。それから、トラックに乗せられて北中城の安谷屋という部落に連れていかれた。そこの部落は、ほとんどの家が残っていてそこにしばらくいた。食べ物がないので、ひもじくて弟と二人でセミを焼いて食べた事もあるんだよ。

安谷屋から、また金武村の中川の収容所に連れて来られて、そこには茅葺の平屋がたくさん作られていて、中に入ってみると床がなくて、それで木の葉っぱやススキの葉を敷いて住む事にしたよ。たくさんの人が一緒に住んでいたよ。食べ物は、少しの米と缶詰の配給があって、鍋の代わりに空き缶を使って食事を作っていたよ。夜になると人の畑からカズラをぬんできて、少しの米とたくさんのカズラを入れて食事をしていたよ。白いご飯を食べた事は全く無かったよ。

おばあさんと妹のケイコちゃんは、戦争では生き延びたが中川の収容所で栄養失調で死んでしまったよ。それで、ハッちゃんが弟や妹の面倒も見なければならなかったよ。ハッちゃんは学校にも行けなくてね、弟はひねくれて大人の誰にでも反抗していたよ。ハッちゃんはどうする事も出来なくて、生きる力も無くなって寂しくって悲しくて辛い毎日だったよ。ケイコちゃんも食べ物が無くて、栄養失調になって痩せ細って２歳近くになっても、立つことも出来なかったよ。あの時のケイコちゃんの寂そうな顔、悲しそうな目、今でも思い出すと涙が止まらないんよ。ケイコちゃんはある時から、ひもじくても寂しくても泣かない子になっていたよ。ハッちゃんは夜になると、いつも悲しくて泣いてばかりだったよ。ある晩泣き疲れてウトウトしていると、母ちゃんが「ハッちゃんは姉さんでしょう、しっかりしてよね。いつまでも悲しんでばかりではだめでしょ。」と言うので、母ちゃんは生きていたんだと思って目が覚めたら夢だと分かった。それで、その日から弟や妹の為にもくじけてはいけないと思い、頑張って行こうと思ったよ。おばあさんが亡くなる前に、いつも言っていた言葉が「ハッちゃん、お兄さんは必ず生きているはずだから兄さんから勉強を習うんだよ。」と言っていたのに、お兄さんは戦争が激しくなってから一度家族に会いに来たきりで、待っても待っても帰って来なかった。

中川にある収容所から浦添の収容所に来て最初に目にしたのは、見渡す限りの焼け野原になっていたのには驚いたよ。木の一本、家の一軒も無かったよ。いたる所に爆弾の落ちた後に水がたまって池になっていて、弟は泳いで遊んでいてほとんど学校には行かなかったよ。ある日爆弾の破片でケガをして破傷風になって、食べ物も口に入れる事が出来なくなって、弟は死ぬかもしれないと思い、ハッちゃんは弟の為に頑張って行こうと思っていたのに、もうその時は生きる力も無くなっていたよ。でもね運よく破傷風は治る事ができて、生きていてくれて本当に良かったと思ったよ。

てだこ市民大学

卒 業 研 究

地域・学校支援
学部名：コーディネーター養成学部
氏 名： 大浜 明美

1. テーマ

結の心で潤いのある地域に
～公園の再生を通して～

2. テーマ設定理由

私は平成24年度から浦添ニュータウン婦人会の会長として、婦人会会員の意識の高揚に既存の活動に美化活動を追加しスタートしました。「公園を再生し花壇をつくる。きれいな環境で子ども達を見守り、地域の憩いの場にする」を目的に平成24年度『まちづくりプラン賞』、平成25年度は『花と緑のフェスタ事業』へ応募することが出来ました。

公園の管理は婦人会会員や地域の方々に関わってもらいました。そこで、一人ひとりが心を寄せ合い共働することで繋がっていき、潤いのある地域になることを願い本テーマを設定しました。

3. 項立て（概要でも良い）

(1) はじめに

(2) まちづくりプラン賞へ応募

(3) 花と緑のフェスタ事業へ応募

(4) 共働の場づくり

(5) 成果と課題

(6) おわりに

（1）　はじめに

私の住んでいる浦添ニュータウン地域は、1971 年（昭和 46 年）に振興住宅地として開発されたところです。働き盛りで夢を追い、沖縄中から入居してきた方々は、当初から地域の課題に目を向け、積極的に住み良いまちづくりを推進してきました。特に、子育ての面では、「地域の子は地域で育てる意識」が高く、早々と自治会を結成しユイマールで子育て環境、住環境を整え『子育て世界 100 選』にも輝きました。

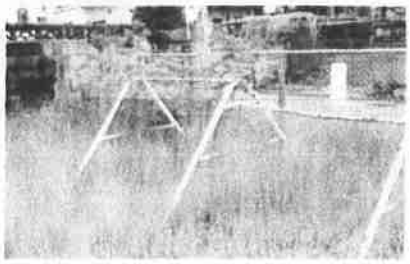
また、子や孫に『ふるさと』を意識づけるために、自治会・婦人会・老人会・子ども会が連携を密に共働し、安全で活気ある地域へと歴史を刻み 42 年になります。

しかし、今では(H25.3.30 現在)人口 2,223 人、65 歳以上は 624 人で高齢化率が 28.1%(浦添市では 2 番目)と高くなり、社会の変容と価値観の多様化で、あの頃の活気が薄れてきているように感じます。

私は、以前から地域の中心にある公園（広場）が荒れ放題になり、遊具も錆がひどく、子ども達が安心して遊べる状況でないのが気になっていました。そんな時地域の婦人会長として、婦人会組織に「自分の足元で出来るときに出来ることから地域に関わり、少しでも潤いのある地域にしましょう」といろいろな方に声かけをしてきました。その中で「踊りは苦手だけど美化活動なら会員になってもいいよ」と一人の方の声で以前から気になっていた公園再生を新たな活動の拠点にしました。

（2）　まちづくりプラン賞へ応募

地域の美化活動は老人会（第 1 世代）が公民館周辺を毎週土曜日の朝に活動しています。婦人会は、地域の中心にある約 50 坪の『子ども遊び場』で活動をすることにしました。これまでは近所の方がボランティアで草刈りをしていましたが、高齢で活動が困難になり、草が生い茂り遊具は錆状態になっていました。そこで①公園に花壇をつくる。②ベンチを置き憩いの場になれるようにする。 ·③子ども達が安心して遊べる環境づくりを目標に平成 24 年度の活動をスタートしました。これまで何度も花を植えてきた方々から、「この土地は粘土質で、水はけが悪く花壇には適しない。また水の確保が難しい」等の声があり、花壇にするには、土の入れ替えをする厳しい課題が出てきました。その頃、地域の方から浦添市の『まちづくりプラン賞』へ応募を進められチャレンジしました。プランが認められ活動に熱が入り、地域の支援者が次々に増え、花壇が仕上がっていく喜びをみんなで味わうことができました。



（4）　共働の場づくり

(1) 話し合いで公園の水道料金は自治会が負担することになりました。
(2) 若草会(老人会)の方々に地域の人材を紹介してもらい、相談役になってもらっています。
(3) 婦人会は毎回の定例会で現状と作業の進捗状況について話し合いをもっています。また、婦人会広報（つどい）でも毎月地域の方に啓蒙しています。

【活動の経緯】

平成24年

・５月・・役員での草刈りからスタート
・７月・・まちづくりプラン賞へ応募
・９月・・助成金（194,000円）
・10月・・花壇用ブロック(ガーデンエース)で周りを囲む
・11月・・花の苗植え付け地域の皆さんが大勢の中に高校生も参加協力
・12月・・公園に何度も花の育成を試していた地域の方からタチアオイの苗の提供

平成25年

・２月・・美化コンクール参加
・３月・・ガーデンパーティー

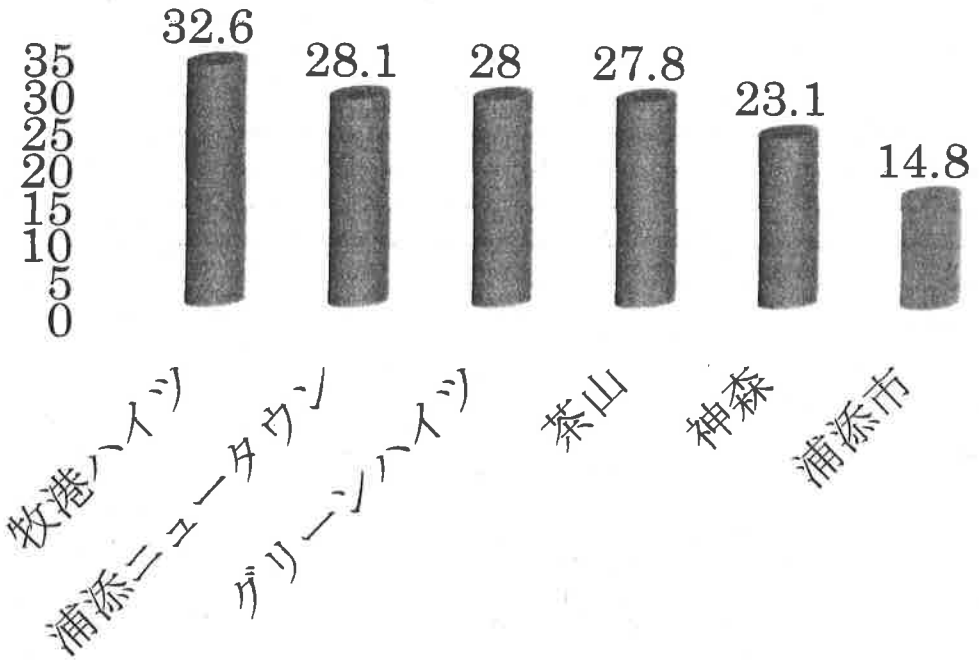
・８月・・フェスタ事業で公園整備工事
・11月・・整備工事完成
・11月・・花の植え付け(花壇へ)

平成２６年

・２月・・公園内にホース置き完成
・２月・・美化コンクール参加

添付資料１

浦添市行政区別高齢者人口・６５歳以上単身者数(浦添市福祉課より)



添付資料２

浦添ニュータウン音頭

作詞　ニュータウン老人会若草会
作曲　玻名城　長要
編曲　中村　透
歌　玻名城　律子

一
てだこのまちのニュータウン
島の北から　南から
夢と希望を　胸に抱き
みんな集いて　街づくり

二
てだこのまちのニュータウン
花と緑の　まちづくり
老いも若きも　手をとりて
明るい元気な　夢の街

三
てだこのまちのニュータウン
みんな仲間だ　和の里よ
未来を築く　子や孫に
誇れる我が街　故郷だ

四
てだこのまちのニュータウン
みんなで築いた　よい街だ
文化花咲く　わしたまち
ここがふるさと　ニュータウン

てだこ市民大学

卒　業　研　究

地域・学校支援
学部名：コーディネーター養成学部
氏　名：　荻堂　かおり

1．テーマ

学校、家庭、地域をつなぐ取り組み

～　地域・学校支援ボランティア活動を振り返って　～

2．テーマ設定理由

現在、子どもを通して、地域や学校でさまざまな活動に携わっている。地域の子は地域で育てる…まさに、私が子どもの頃はそれが自然であった。

私が子を持つようになった今、その自然だった風景が少なくなったと感じる。道行く子に簡単に声かけすることすらできない状況は地域コミュニティーの危機である。自分の子どもを地域の中で育てたい…その思いから今の活動に至る。

しかし、学校と家庭、学校と地域、地域と家庭それぞれの結びつきはどうだろうか。地域や学校で支援ボランティアとして活動しながらその結びつきの弱さを実感している。『子どもたちを通して、学校や地域を強く結びつけたい』『子どもたちが、学校や地域に愛着をもてるようにしたい』私にできる役割について考えたいと本テーマを設定した。

3．項立て

1．テーマ設定理由
2．研究内容
　（1）学校での活動
　　①読み聞かせボランティア
　　②家庭教育学級
　　③みやぎっ子放課後子ども教室
　　④PTA 活動
　（2）地域での活動
　　①小湾自治会及び子ども会育成会
　　②みらい子育てねっとこのゆびと～まれ！
3．成果と課題
4．今後の取り組み
5．終わりに

① 読み聞かせボランティア

毎週月曜日の朝、読み聞かせボランティア『クレヨン』による活動を行っている。読み聞かせを通した保護者や地域の方との関わりの中で、子どもたちに思いやりや優しさ、協調性などの社会性を身に付けてほしいと願いながら活動している。また読み聞かせを通して、子どもたちに本の楽しさを体感してもらい、読書に親しみをもつ取り組みを行っている。

② 家庭教育学級

浦添市教育委員会の事業である家庭教育学級は、家庭における教育力の更なる向上を目的に位置づけ、宮城小学校でも積極的に取り組んでいる。

親の学びの場として様々な講座を企画し、一人でも多くの保護者に、気軽に楽しみながら学べる学習の機会を提供している。

《主な講座》

・浦添市消防本部による救急法講座
・浦添市特別支援巡回指導員による親と子のいい距離感についての講話
・アロマを取り入れた料理講習
・異文化見学　キャンプキンザークリスマス点灯式　など

③ みやぎっ子放課後子ども教室

平成19年度より文部科学省及び厚生労働省の連携のもと『放課後子どもプラン推進事業』が始まり、宮城小学校でも『放課後子ども教室』が実施されている。

放課後の子どもたちの安全で安心な居場所を確保し、学ぶ意欲のある子どもたちに学習機会や文化活動などの体験を提供する取り組みを行っている。

《活動日》

放課後の16時～17時までの1時間

・毎週月曜日…工作教室
・毎週木曜日…パソコン教室
・その他…夏休みの工作、科学実験
秋休みの星空観測会
新春もちつき体験　他

④ PTA活動

宮城小学校では、一人一役の活動推進のもと、保護者・教師・地域が互いに協力し合い、子どもたちの健全育成をめざし活動している。

校内環境整備、朝の声かけ、各種校内行事など協力できる方々と交流を深め、少しずつ仲間の輪を広げながら活動している。

《主な活動》

・校内環境整備
・交通安全街頭指導
・運動会テント設営
・校内マラソン大会
・保護者向け学習会
・夜間パトロール　他

3．成果と課題

成果

子どもたちにとって体験の差が学力の差になってはならない。これまでの活動は、学校の授業や家庭教育だけではできない学びを体験することにより、子どもたちの体験の格差を補うことができている。

子どもたちには、学校の先生や家族だけではない地域の大人や異年齢の子どもとのかかわりの中で相手を思いやる心や協調性も育っている。

子どもたちのために協力してくれる地域の方とつながることで、私たち親の学びの場にもなっている。

課題

学校と家庭はPTA組織を通したつながりがあるが、今よりも活動を高めたい。学校と地域はそれぞれの行事や交流を通して、もう少し開かれた関係でありたい。地域と家庭がつながる方法は自治会への加入であるが、加入率は依然低い状況である。学校と家庭、学校と地域、地域と家庭のつながりの弱さが、各活動において少なからず影響をもたらしている。３者の関係を強めながら、学校や地域での活動に興味を持ってもらい、共に活動する仲間をどう増やしていくかが課題である。

4．今後の取り組み

小学校で懸命に活動している方を見て感じるのは、共に活動する仲間がいることだ。未就園児の頃に子どもを通して出会い、小学校入学後その絆は学校での活動を通してさらに深まっているようだ。未就園児親子のつながりが子どもの進学を機に学校とつながり、家庭とつながり、地域へとつながるのだろう。

私が活動している一つに『みらい子育てねっとこのゆびと～まれ！』という子育て団体がある。まずはその活動の中で、未就園児親子交流の場を作る。親子で参加できる体験活動や講演会などを通して、仲間を作ることの大切さや子どもを通した社会参画の大切さを丁寧に伝えていきたい。未就園児親子交流の体験が、いずれは学校や地域に対して自然と愛着がもてるようつなげたい。

子どもの成長とともに、親も一緒に成長できる学びの場となることを目標に取り組んでいく。

5．終わりに

市民大学での学びを通して素晴らしい先生方からのご指導、また現在活躍されている諸先輩方との出会いに感謝申し上げます。

市民大学での学びに誇りをもち、子どもたちの笑い声が響きわたる地域をめざして、これからも学校と地域で活動を続けていきます。